

# 石川県埋蔵文化財情報

## 第 33 号

巻頭図版(相坂遺跡、相神東シンカイB遺跡、金沢城下町遺跡(東兼六町5番地区))

平成26年度上半期の発掘調査から……………調査部長 藤田 邦雄…(1)

### 発掘調査略報

相坂遺跡、相神東シンカイB遺跡(志賀町)……………(2)

南新保E遺跡(金沢市)……………(4)

新庄カキノキダ遺跡(野々市市)……………(5)

徳光聖興寺遺跡・徳光ヨノキヤマ遺跡(白山市)……………(6)

加茂フルドウ遺跡(加賀市)……………(7)

加茂キツネ塚遺跡(加賀市)……………(8)

平成26年度上半期の遺物整理作業……………(9)

平成26年度環日本海文化交流史調査研究会の記録……………(12)

はじめに……………所長 福島 正実…(12)

### 近世墓にみる階層性

—筑前秋月藩城下の寺院墓地を対象として—……………時津 裕子…(13)

山陰における近世墓……………中森 祥…(16)

越前・若狭における近世墓の様相……………村上 雅紀…(19)

金沢城下の近世墓地……………庄田 知充…(23)

石川県における近世墓……………和田 龍介…(26)

富山県における江戸時代の墓……………田上 和彦…(34)

新潟県における江戸時代の墓……………相羽 重徳…(37)

東北地方日本海側における近世墓……………高橋 学…(40)

討論と見学会について……………和田 龍介…(43)

2015年3月

公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター

## 写真解説

### 相坂遺跡、相神東シンカイB遺跡

#### 遺跡遠景（南から高爪山を望む）

相坂遺跡、相神東シンカイB遺跡は、志賀町北西部、旧富来町の酒見川と富来川に挟まれた区域にあり、県営ほ場整備事業相神地区に伴い調査した。低丘陵先端の少し小高い丘全体に相坂遺跡は広がっており、その西側の少し低い所に相神東シンカイB遺跡が位置している。

#### 相坂遺跡 E-5区竪穴建物

丘陵の南東端に近いE-5区で検出した弥生時代の竪穴建物からは多くの土器とともに石鏃やその剥片が大量に出土した。原石と考えられる石塊も出土しており、肉眼観察では遺跡の北に位置する高爪山の麓、大福寺地区で産出される「糸巻き石」と呼ばれる安山岩と特徴が似ている。



遺跡遠景（南から高爪山を望む）



相坂遺跡 E-5区竪穴建物

## 写真解説

### 金沢城下町遺跡（東兼六町5番地区）

#### 越前焼甕

福井県丹生郡越前町で生産された陶磁器です。江戸時代を通じて石川県でも広く流通していました。写真の甕は土葬の甕棺として用いられたもので、本遺跡の甕棺はすべて越前焼甕が使われています。

#### 甕棺の出土状況

限られた墓域に葬るためか、前に埋められた甕を壊しながら新しい甕を埋める例が多く見られました。写真では中央の甕を掘る際に、元からあった甕を壊してその破片を支え（写真左前）にしているものです。左奥には壊されずに残っている甕棺が見えます。



越前焼甕



甕棺の出土状況

# 平成 26 年度上半期の発掘調査から

調査部長 藤田 邦雄

平成 26 年度は、石川県教育委員会から 20 件の発掘調査を受託した。関係機関ごとの調査件数は、国土交通省 6 件、県農林水産部 1 件、県土木部 10 件、県環境部 1 件、県民文化局 1 件、県立中央病院 1 件であった。本号では平成 26 年 4 月から 10 月前半にかけて当法人が実施した 6 遺跡の発掘調査の概要を紹介する。

相坂遺跡、相神東シンカイB遺跡（志賀町）は、県営ほ場整備に伴う調査であり調査範囲は丘陵全体に広がる。各調査区により様相は異なるが、相坂遺跡でみつかった弥生時代後期の竪穴建物からは大量の土器と共に石織やその素材、製作過程で生じる剥片など多くの石製品が出土した。また、相神東シンカイB遺跡では、古代、中世の遺構を検出し、調査域からは鉄滓の出土を確認しており、遺跡周辺に存在する製鉄遺跡との関連が目される。

加茂キツネ塚遺跡（加賀市）は、弥生時代の集落域にあたる。調査区南部では弥生時代後期後半の河跡を確認し、その内部からは土器がまとまって出土した。

新庄カキノキダ遺跡（野々市市）では、調査区南部で直径約 6 m、深さ 20cm の半円形をなした窪みとその周囲で多数の小穴を確認した。内部からは縄文時代晩期の土器や打製石斧が出土しており、過半が削平された縄文時代の竪穴建物の可能性がある。

県立中央病院の整備に伴う新南保E遺跡（金沢市）では、平安時代の井戸 2 基を検出した。1 基は縦板組み横積留め、もう 1 基は内部に曲物を置くタイプで、井戸内からは須恵器、土師器と共に畜産物が出土した。

平成26年度発掘調査遺跡

No	発掘遺跡	遺跡名	所在地	調査面積 (㎡)	主な時代	関係機関	関係事業
1		中カワナミマダ遺跡	輪高市三井町中	1,300	古代	国土交通省	一般国道 470 号盛越自動車道橋脚道路建設
2		古府・因分遺跡	七尾市因分町	150	古代・中世		一般国道 159 号建設（七尾バイパス）
3		細尾神社遺跡	かほく市二ツ屋	950	弥生		一般国道 159 号 ニツ屋北自動車整備
4	○	加茂フルドウ遺跡	加賀市加茂町	715	古墳		国道 8 号改修（加賀振興）
5		一戸C遺跡	小松市一針町	7,600	土師・古墳～中世 土師・弥生～古墳	福川改修	
6		津町遺跡	小松市金屋町	1,000	弥生～古代・中世		
7	○	相坂遺跡、相神東シンカイB遺跡	志賀町里本区、給分、相神	3,280	弥生～中世	県農林水産部	ほ場は地盤整備 相神地区
8		二所宮サンマイダ遺跡	志賀町二所宮	830	古墳～古代	県土木部	県単道路改良（一）沼内田橋渡線
9		福久遺跡	金沢市福久町	1,500	古代		地方道改修（一）粒爪森本停車場線（海朝町線区間）
10	○	徳光聖賢寺遺跡、徳光ノコキヤマ遺跡	白山市徳光町	1,600	中世		地方道改修（七）金沢美川小松線
11		矢田新遺跡	小松市矢田新町	4,180	古墳～中世		いしかわ広域交流府県幹線道路整備 南加賀道路（兼津ルート）
12	○	加茂キツネ塚遺跡	加賀市加茂町	450	弥生	地方道改修（一）片山津山代線	
13		加茂ボケ生水ウラ遺跡	加賀市加茂町	3,190	弥生・古代・中世		地方道改修（一）片山津山代線
14		北川田ノロシテ遺跡	志賀町北川田	3,400	弥生～古代		広河川改修 二歳河川米町川
15		二日市インバシ遺跡	野々市市二日市町ほか	3,620	土師・中世 土師・弥生～古墳		広河川改修 二歳河川安原川
16	○	新庄カキノキダ遺跡	野々市市新庄 1 丁目	510	縄文・古代	広河川改修 二歳河川高橋川	
17		金沢城下町遺跡（東葉六町5番地区）	金沢市東葉六町	1,550	近世	県環境部	急傾斜地崩壊対策工事 東葉六町 1 号
18		戸水ホコダ遺跡	金沢市輪舟 5 丁目	240	弥生～古代		石川県水道用水利施設
19		金沢城下町遺跡（本多氏居敷跡地区）	金沢市出羽町	680	近世		県民文化局
20	○	新南保E遺跡	金沢市輪舟東 2 丁目	4,350	古代・中世	県立中央病院	県立中央病院整備
6 件		20 件		41,295			

## 相坂遺跡、相神東シカイB遺跡

所在地 羽咋郡志賀町給分、里本江、相神  
調査面積 3,280㎡

調査期間 平成26年4月22日～同年10月21日  
調査担当 川畑 誠 端 猛 萩山教授



遺跡位置図 (S=1/25,000)

### 調査成果の要点

- ・相坂遺跡では、弥生時代の竪穴建物や奈良・平安時代の掘立柱建物などを確認した。
- ・相神東シカイB遺跡では、奈良・平安時代の掘立柱建物や中世の室状遺構を確認した。

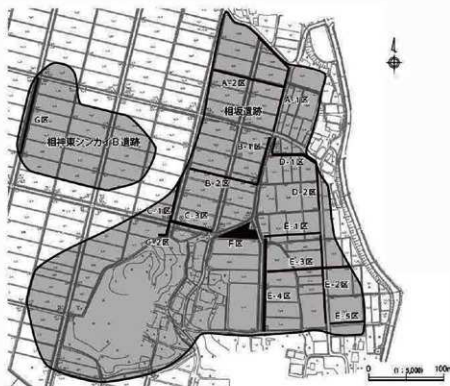
相坂遺跡、相神東シカイB遺跡は、志賀町北西部、旧富来町の酒見川と富来川に挟まれた区域にある。調査は県営ほ場整備事業相神地区に伴うもので、低丘陵先端の少し小高い丘全体に相坂遺跡は広がっており、その西側の少し低い所に相神東シカイB遺跡が位置している。ほ場整備事業では通常、盛土等の工法で極力埋

蔵文化財包蔵地の現状保存を図り、用排水路等やむをえない部分のみ記録保存としている。今回の調査も広大な範囲で用排水路を中心に、幅1.5m～3m、総延長1km以上に及ぶトレンチが調査の主体となった。

相坂遺跡では、弥生時代の竪穴建物や奈良・平安時代の掘立柱建物などを確認した。特に、丘陵の南東端に近いE5区で検出した弥生時代の竪穴建物からは多くの土器とともに石鏃やその剥片が大量に出土した。原石と考えられる石塊も出土しており、肉眼観察では遺跡の北に位置する大福寺地区で産出される「糸巻き石」と呼ばれる安産岩と特徴が似ている。また、E2、E3、E4区として調査した地点からは奈良・平安時代の掘立柱建物と考えられる柱穴列及び柱穴が複数検出され、井戸とみられる土坑も複数検出している。狭い調査区のため、詳細な建物の規模や配置の復元に至っていないが、かなりの規模の集落となろう。このほか、丘陵の裾にあたるC1区では不定形な土坑が連続して検出された。出土遺物が少ないもののその一つからは漆器椀が出土しており、中世の土坑墓の可能性もある。A2区で掘立柱建物の柱穴列が検出されているが、A区、B区、D区とした範囲では昭和40年前後に行われた耕地整理の影響を受け、遺構面が削平されている地点もあった。

相神東シカイB遺跡では、排水路にあたる部分をG区として調査した。G区からは掘立柱建物と考えられる柱穴が多数確認され、室状の大型土坑も検出した。また、G区の東側で遺構面が一部露出しており、柱穴の形状や覆土、露出している遺物から奈良・平安時代の側柱の建物と中世の総柱の建物を数棟確認した。この建物周辺やG区で鉄滓が一定量出土しているが、調査では炉跡等の痕跡は確認できていない。この地の北方には高爪山が位置しており、山頂部の山岳信仰遺跡や山麓の製鉄遺跡が知られている。今回の調査で出土した鉄滓とこれら製鉄遺跡との関連が注目される。今後は、周辺遺跡との関連も含め資料を精査し検討を進めたい。

(端 猛)



遺跡範囲と調査区 (S=1/5,000)



遺跡遠景 (東から増穂浦を望む)



遺跡遠景 (南から高爪山を望む)



E-5区竪穴建物 (相坂遺跡 南東から)



調査の様子 (相神東シシカイB遺跡 北から)



## 南新保 E 遺跡

所在地 金沢市鞍月東2丁目地内  
調査面積 4,350㎡

調査期間 平成26年5月1日～同年10月8日  
調査担当 瀧野勝利 熊谷葉月 神谷英生



遺跡位置図 (S=1/25,000)



井戸 (SK1)



井戸 (SK12)

南新保E遺跡は、金沢港から南東へ約4kmの低地に立地する弥生～中世の集落遺跡である。今回の調査は県立中央病院整備事業を原因とし、昨年度に引き続き実施された。平成21年度の調査では、南に隣接する地点で平安時代の井戸や弥生時代の溝などが検出されている。また、西に少し離れた平成7・8年度の調査区では、区画溝と獨立柱建物などが検出され、古代から中世への土地利用の変遷が確認されている。

今回確認した主な遺構には、平安時代の2基の井戸があり、一つは曲物、もう一つは縦板組み横棧留めの枠を持つものであった。いずれも須恵器、内黒の土師器碗、茶巾などが出土した。そのほか、井戸と同時期と思われる柱穴列を検出した。遺物は、近世以降の川跡や近現代の耕作排水溝など遺構外からの出土が多く、古代の須恵器、土師器を中心に、弥生土器も少しであるが出土している。

全体的に遺構が希薄で、検出された井戸や柱穴もかなり上部が失われている。特に調査区の東側ほど遺構・遺物が少なくなる傾向がみられた。近代の耕地整理などで土地が削平され、浅い遺構が削られた可能性が考えられる。(熊谷葉月)



遺跡遠景 (北北東から)

## 新庄カキノキダ遺跡

所在地 野々市市新庄1丁目地内  
調査面積 510㎡

調査期間 平成26年8月4日～同年9月16日  
調査担当 澤辺利明 中森茂明



遺跡位置図 (S=1/25,000)

遺跡は、野々市市南東部にひろがる住宅地の中に位置し、周辺の標高は約46mを測る。

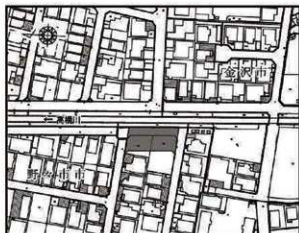
発掘調査は、市域東側を南北に流れる高橋川の河川改修事業にともなうもので、川の左岸部が調査区域である。

調査の結果、調査区北半部では、小穴多数と溝1条を確認した。溝は幅約2m、深さ約50cmで、平安時代中頃の須恵器、土師器が多数出土した。小穴は平安時代の掘立柱建物柱穴とみられ、これに接して位置する溝は、建物周囲に配置された区画溝の可能性がある。

調査区南半部では、半円形の窠みとその周囲で小穴多数を確認した。窠みは直径約6m、深さ約20cm。高橋川に面した東側が削平されており全容は明らかにできなかったが、内部から平安時代の土器のほか、少量の縄文時代晩期の土器と打製石斧2点が出土しており、縄文時代の竪穴建物の可能性がある。その周囲に密在する小穴についても、平安時代の建物柱穴のほか、縄文期の遺構が含まれる可能性がある。

本遺跡では今後も発掘調査が予定されており、その中で、今回検出した遺構の性格が明らかとなることが期待される。

(澤辺利明)



調査区位置図 (S=1/2,500)



調査地から北方を望む



南半部完掘状況 (北から)

## 徳光聖興寺遺跡・徳光ヨノキヤマ遺跡

所在地 白山市徳光町地内

調査面積 1,600㎡

調査期間 平成26年6月4日～同年8月28日

調査担当 久田正弘 横山純子



遺跡位置図 (1/25,000)

### 調査成果の要点

・中世遺跡の縁辺部を調査した

本調査は主要地方道金沢美川小松線の拡幅（4車線化）に係る発掘調査である。調査地は周知の埋蔵文化財包蔵地である徳光ヨノキヤマ遺跡および徳光聖興寺遺跡が重複する箇所である。昨年度の調査区の南側に位置し、徳光聖興寺跡石碑が設置された道路を境にして、東調査区と西調査区に分かれ、中世以降の遺構・遺物を確認した。

東調査区では中央付近に東西方向の溝群が2箇所あり、畚跡（畝溝）と思われる。南側には北北西方向に流れる溝群があり、用水路跡と思われる、直径4.5cm器高4.3cmの小型香炉（青磁）が出土した。また方形と思われる大型土坑もあるが、規模や性格などは不明である。

西調査区は寺院跡の伝承がある徳光聖興寺跡の西側にあたり、用水路跡と思われる溝2本や数条の溝群（畝溝）などを確認した。

本年度調査区では、明確な柱穴は確認されず、出土遺物も少量なことから、両遺跡の縁辺部にあたる。

（久田正弘）



東調査区 畝溝



東調査区 用水路跡



東調査区 大型土坑

## 加茂フルドウ遺跡

所在地 加賀市加茂町地内  
調査面積 715㎡

調査期間 平成26年5月14日～6月5日  
調査担当 浜崎悟司 中森茂明



遺跡の位置 (S=1/25,000)

加茂フルドウ遺跡は加茂集落の南縁に展開した、古墳時代から中世にかけての遺跡である。国道8号改修（加賀拡幅）工事に先立つ確認調査の際に発見された遺跡であり、同原因による今回の発掘調査が初めてのものとなる。

遺構検出面は現況下25～80cm程度の黄白～黄褐色粘土層である。安定した基盤層であり、調査区全域の同層上面から黒色土斑が明瞭に検出されたが、それらはいずれも木根や倒木痕と判断された。

出土遺物には基盤層を覆う黒色土や後世の擾乱土から出土した古墳～中世の土器片がある。須恵器では7世紀前半頃にまとまりが認められるが、少量にとどまる。  
(浜崎悟司)



作業状況（調査地北部）

## 加茂キツネ塚遺跡

所在地 加賀市加茂町地内

調査面積 450㎡

調査期間 平成26年5月12日～同年6月11日

調査担当 澤辺利明 萩山教俊



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

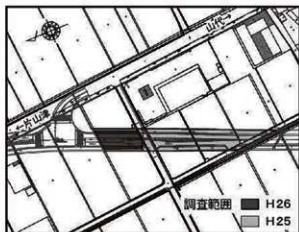
加茂キツネ塚遺跡は、石川県の南西端を占める加賀市にあって、市域北部にひろがる江沼盆地の中ほど、加茂町北側の水田中に位置する。周辺の標高は6m前後を測る。

発掘調査は県道片山津山代線改築事業にともなう。片山津・山代温泉間の既存道を加茂集落西側に迂回させるバイパス道路新設にかかるものであり、昨年度に続く第2次調査となる。

調査の結果、川跡や水路跡とみられる細溝、小穴などを確認した。幅約6m、深さ0.7mの川跡は、南東から北西に蛇行しながら調査区を斜行しており、自然河道とみられる。その底に堆積した有機物を多く含む砂層からは、弥生時代後期後半から終末頃の土器がまとまって出土した。

昨年度は、今回調査区南東側と道路両側の水路敷設箇所の調査を行ったが、土坑1基のほか細溝、小穴をわずかに確認したのみで、調査区域内において遺構・遺物は全般に希薄な状況であった。川跡の遺物出土状況を勘案すると弥生集落の主体は、川の上流域にあたる調査地南東方向にあるものと推測される。また、古代、中世の遺物も少量出土しており、周辺に該期の遺跡が存在する可能性がある。

(澤辺利明)



調査区位置図 (S = 1 / 3,000)



調査区透景 (南西から)



川跡 (北西から)

## 平成 26 年度上半期の遺物整理作業

### 国関係調査グループ

上半期は、金沢城下町遺跡（東兼六町 5 番地区）（金沢市 平成 25 年度調査）、北吉田ノシロタ遺跡（羽咋郡志賀町 平成 25 年度調査）、金沢城跡（金沢市 平成 25 年度調査）の整理をおこなった。

金沢城下町遺跡（東兼六町 5 番地区）は、県関係調査グループ、特定事業調査グループと合同で行った。内容は特定事業調査グループの報告を参照。

北吉田ノシロタ遺跡では、記名・分類・接合と実測・トレースを行った。弥生時代後期から古墳時代前期を主とする遺跡であるが、縄文時代の深鉢や、須恵器等の遺物も含む。弥生・古墳時代の甕、壺、高坏、鉢、椀等の土器、砥石等の石製品、礎板や柱根等の木製品が出土しており、良好な状態の遺物が多かった。

金沢城跡では、玉泉院丸の南石垣から出土した遺物の記名・分類・接合と実測・トレースを行った。遺物の大半は石垣に埋め込まれた廃棄された瓦であるが、思いのほか接合可能なものが多かった。他に陶磁器類、土製品、銅銭、石製品等がある。瓦では、棟瓦と腰瓦に金沢城内では類例の少ないものが多く出土している。また、土製品も金沢城内としては多く出土しており、人形、動物、兜、こまなど種類も多い。

（横山そのみ）



木製品の実測（北吉田ノシロタ遺跡）



瓦の記名・分類・接合（金沢城跡）



瓦の記名・分類・接合（金沢城跡）

## 県関係調査グループ

上半期は、金沢城下町遺跡（東兼六町5番地区）（金沢市 平成25年度調査）、徳田宮前遺跡（志賀町 平成25年度調査）、高見遺跡（白山市 平成25年度調査）、南新保E遺跡（金沢市 平成25年度調査）、米永ナデソオ遺跡（白山市 平成25年度調査）、一針C遺跡（小松市 平成25年度調査）、花園・黒崎遺跡（七尾市 平成23年度調査）、加茂キツネ塚遺跡（加賀市 平成25年度調査）、宮保B遺跡（白山市 平成25年度調査）、長池ニシタンボ遺跡（野々市市 平成21、25年度調査）、加茂新高遺跡（加賀市 平成25年度調査）と11の遺跡の整理を行った。整理した遺跡の数からわかるように、遺物量が少なく短期間で整理作業が終了するものが多かった。

金沢城下町遺跡は、記名・分類・接合のみで、他の10遺跡は記名・分類・接合、実測・トレース、遺構図トレースを行った。

特記しなければならないのは、一針C遺跡の石の実測である。井戸枠に使用された石で大きい物（約50×90×10cm、40kg）が5枚ではほぼ全面加工が残っていた。横に三つケースを並べその上にコンパネを置いてテーブルを作り、体への負担をなるべく少なくする様に工夫したがほぼ一週間かかったのもあってとても辛かった。

（村上泰子）

洗浄は、まず平成25年度調査に係る金沢城下町遺跡（東兼六町5番地区）の木製品について実施した。その後、平成26年度にかかる加茂フルドウ遺跡（加賀市）、加茂キツネ塚遺跡（同）、徳光聖興寺遺跡他1遺跡（白山市）等の出土品について実施した。

（松山和彦）



出土品の記名・分類・接合（南新保E遺跡）



越前薬の接合（花園・黒崎遺跡）



石器実測（一針C遺跡）

## 特定事業調査グループ

上半期は金沢城下町遺跡（東兼六町5番地区）（金沢市 平成25年度調査）、古府・国分遺跡（七尾市 平成24・25年度調査）の整理作業を行った。

金沢城下町遺跡（東兼六町5番地区）は、昨年度に続き今年度も整理作業となり、今年度は特定事業調査グループと国関係調査グループの合同の整理となった。越前焼の大甕、骨壺や蓋、土師皿、石製品、金属製品は昨年度同様だが、新たに土人形、陶磁器の碗や皿の記名・分類・接合、実測、トレース作業を行った。土人形は70体実測した。型抜きのため同じ形の土人形が多数あった。主な木製品は木棺で、外棺と内棺の二重になったものが2基あり、バラバラだった木製品を組み立てると、その立派さに感動しました。

古府・国分遺跡は、土師器、須恵器、墨書土器、金属器、石製品、木製品の記名・分類・接合、実測、トレース作業を行った。土師器では赤彩や内黒が多く、耳皿も3点実測した。木製品は、井戸の隅柱、井戸枠、横棧など大型木製品があり、形も加工も残りがよく、書き応えのある遺物だった。その他は鉄滓、銅銭、砥石、炉壁等を実測、トレースを行った。上半期はトレースまでで、下半期には遺構図のトレースを引き続きおこなうこととなっている。

（小島紀子）



出土品の記名・分類・接合（金沢城下町遺跡（東兼六町5番地区））



土人形（金沢城下町遺跡（東兼六町5番地区））



木製品実測（古府・国分遺跡）



## 平成 26 年度環日本海文化交流史調査研究集会の記録

はじめに

所長 福島 正実

環日本海文化交流史調査研究集会は、日本海に面した石川県の歴史的特質を明らかにするため、日本海沿岸域に共通するテーマを選んで沿岸各地域と調査・研究を行い、交流を図るものです。本研究集会は、公益財団法人石川県埋蔵文化財センターが平成 12 年度から「環日本海文化交流調査研究事業」の一環として実施しており、平成 26 年度で 15 回目の開催となりました。

本年度は全国的にも未解明部分の多い、江戸時代の墓制について、墓地・墓域、埋葬施設、副葬品に焦点をあて、日本海沿岸各地域における資料の集成を行うとともに、その変遷や共通性・地域性を明らかにしたいと考え、テーマを「江戸時代の墓」としました。資料の集成や報告にあたられた皆様に感謝申し上げます。

- 1 主催 公益財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 2 会場 石川県埋蔵文化財センター研修室
- 3 参加者 当法人職員、県内外の埋蔵文化財関係者、考古学研究者、大学生等 90 名
- 4 内容及び日程

- ・事前の打合せ 10 月 23 日（木）午後 3 時～
- ・調査研究集会 10 月 24 日（金）午前 9 時～午後 4 時 30 分

#### 地域別報告

- 九州地方 時津裕子（徳山大学）
- 山陰地方 中森 祥（鳥取県教育委員会）
- 北陸地方（福井県） 村上雅紀（越前町織田文化歴史館）
- 北陸地方（石川県） 庄田知充（金沢市埋蔵文化財センター）
- 北陸地方（石川県） 和田龍介（公益財団法人石川県埋蔵文化財センター）
- 北陸地方（富山県） 田上和彦（高岡市教育委員会）
- 北陸地方（新潟県） 相羽重徳（佐渡市役所）
- 東北地方 高橋 学（秋田県埋蔵文化財センター）

#### 討論

- ・資料見学会 10 月 25 日（土）午前 9 時～ 12 時

#### 調査研究集会の推移

回数	開催期日	事業内容（調査研究集会テーマ）	記録の掲載（石川県埋蔵文化財情報）
第 1 回	H13.2.23	環日本海交流史の現状と課題	
第 2 回	H14.2.22	鉄器の導入と社会の変化	第 8 号
第 3 回	H15.2.21	玉をめぐる交流	第 10 号
第 4 回	H15.10.24	縄文後晩期の低湿地集落－生業の観点で考える	第 11 号
第 5 回	H16.10.29	古代日本海地域の傍と交流	第 13 号
第 6 回	H17.10.28	中世日本海地域の土器・陶磁器流通－薬・密・樺鉢を中心に－	第 15 号
第 7 回	H18.10.27	縄文時代の装身具－漆製品・石製品を中心に－	第 17 号
第 8 回	H19.10.28	日本海域における古代の祭祀－本製祭祀具を中心として－	第 19 号
第 9 回	H20.10.24	弥生時代の家と村	第 21 号
第 10 回	H21.10.23	日本海地域の土器製造－その系譜と伝播を探る－	第 23 号
第 11 回	H22.10.29	古世日本海地域の陶磁器流通－肥前陶磁器から探る－	第 25 号
第 12 回	H23.10.28	中世日本海地域の墓制－その出現と展開－	第 27 号
第 13 回	H24.10.26	弥生時代の墓	第 29 号
第 14 回	H25.10.25	舟と水上交通	第 31 号
第 15 回	H26.10.24	江戸時代の墓	本号（第 33 号）

# 近世墓にみる階層性

—筑前秋月藩城下の寺院墓地を対象として—

時津 裕子（徳山大学）

## はじめに

九州地方では、近世墓の調査数自体が少なく、資料としてまとまったものが見られない時期が長く続いた（井上 1978；小田 1990）。90 年中頃以降、女狐近世墓地（田中 1996）など詳細で良質な調査報告が増加するが、やはりほとんどは開発・改葬に伴う緊急調査で、特定の集落や一族の墓域を対象とする単発的なものであった。このため、近世墓研究から当該期の階層化社会を総体的に論じるのは困難なままであった。

こうした中で、筆者は筑前秋月藩城下の寺院墓地において継続的に調査を実施してきた。秋月藩は福岡藩の支藩にあたり、5 万石の小藩ながら、政治的・経済的には当初から高い独立性を保ってきた。家臣団は、藩が定める家格・役職・禄高等によって厳格に階層化されており、儀礼の際のふるまいや城下の空間構造などにもその構造ははっきりと表れていた（柴多、1980；時津、2000）。筆者が目指したのは、この階層化社会の全体を視野に入れた状態で、近世墓標から階層構造を抽出し、解釈することであった。

## 1. 調査方法

城内下に近接する、寺格・宗派の異なる 4 寺院（古心寺：臨済宗、長生寺：曹洞宗、大涼寺：浄土宗、浄覚寺：浄土真宗）が保有する墓地内の約 700 基について、墓石の実測、写真撮影、刻印内容や装飾に関する記録を行った。現在まで祭祀が継続されている墓がほとんどであるため、下部構造に関するデータは得ていない。また一族ごとのまとまりが明確な墓域については、簡易測量を行い、各墓石の空間配置も記録した。

## 2. 分析

### (1) 型式学的検討と編年

作成した実測図の形態特徴・法量を用いて、属性分析・多変量解析を実施し、11 の墓石形式と 21 型式を設定する型式学的分類および編年を行った。また墓石形式別にまとめたセリエーショングラフを作成し、年代が下ると主流となる墓石形式が板碑型、櫛形、角柱型へと交替する一方で、時代を問わず、自然石という代替選択肢があることが明らかになった。また、高階層者のものとされる笠付型、僧侶の無法塔型、児童に用いられる光背形も、長期にわたって一定の割合で存在することがたしかめられた。

### (2) 墓域ごとの比較

明確なまとまりを形成する 9 つの墓域（黒田家 L、黒田家 C、宮崎家 G、宮崎家 E、林家、木付家、磯家、遠山家、加峯家）を取り上げ、形式の使用頻度、サイズ（墓石の塔身高）、刻印・記載内容等の比較を行い、これらのデータを総合することで各墓域の階層を推定した。

### (3) 文献史料との対照

墓石に記載された被葬者の俗名を、幕末から明治期にかけて編さんされた藩内の役職担当者一覧（『秋月藩累代役人名列』、『秋月諸士以下共名付』）や家臣一族の出自と系譜（『秋月諸士系譜』）、分限帳（『秋月諸士分限』、『秋月役々分限』）に記載された氏名と照合し、被葬者の家格・役職・禄高（石高）数、武芸や学問社会貢献など個人の功績についての情報を得た。また一部被葬者については、城下の古地図と照合することで居宅（敷地）の位置と大きさが判明した。

### 3. 考察

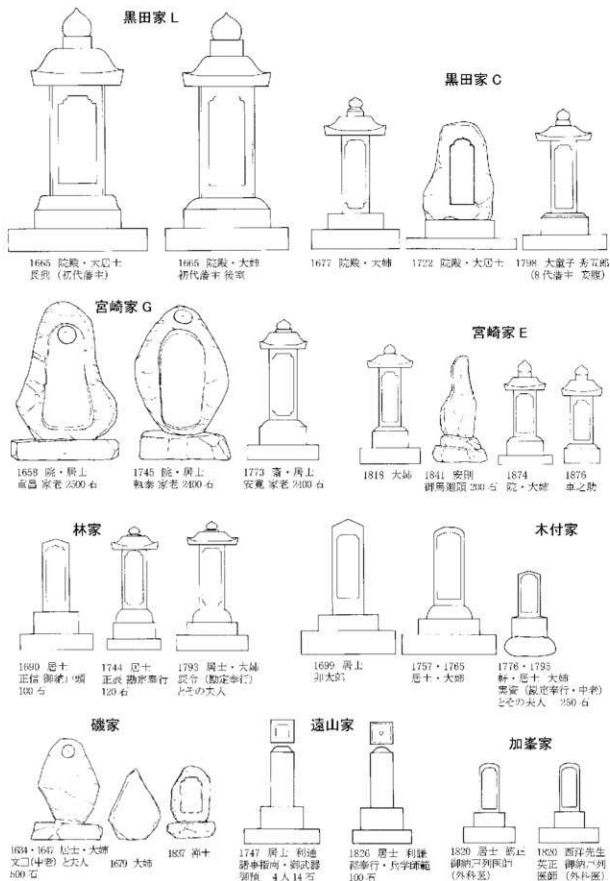
墓石の形態（形式）、サイズ、戒名等の考古学的分析によってもたらされた階層の推定結果は、文献史料から明らかになる被葬者情報と概ね一致していた。墓石サイズの格差は数千石を受け取る重臣から100石～数人扶持の禄が支給される下級武士間で明らかであり、そのことはまた、上級武士の指標とされる笠付型墓石の選択率や、戒名の格（院（殿）号の有無、位号の種類等）や個人の功績など記載事項においても同様であったといえる。ただし、これらの要素を複合させて階層推定する場合、やや複雑な様相を呈することになる。形態×サイズの組み合わせで見たとき、たとえば藩主の子女（黒田家C）と家老職を輩出した重臣一族（宮崎家G）を比較すると、使用形式（笠付型の頻度）で勝るのは前者であるが、サイズで勝るのは圧倒的に後者となる。形と大きさとどちらの要素を優先させて判断すればよいのであろうか。この問題は、都出（1989）が古墳を例として言及したように、考古学的推定の難しさや限界を示すものであるといえるだろう。しかし同時に、その上下関係が判然としないところが、高度に階層化された複雑な社会においては、有効に機能している側面もあるのではないだろうか。一族の政治力や経済力を誇示することには利点だけでなく、他の一族との競合や対立を深めるリスクがある。そして緊張関係に陥る相手が、制度や社会通年によって自分より高位の階層と位置づけられている場合、リスクは最も大きくなるだろう。宮崎家が藩主の子女一族を凌駕するサイズの墓を建てる際に笠付型墓石を決して用いないことも、社会戦略の一環として解釈できるかもしれない。

### 【文献】

- 井上裕弘編 1978 『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』, 9 福岡: 福岡県教育委員会。  
 小田和利寛編 1990 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』, 16 福岡: 福岡県教育委員会。  
 柴多一雄 1980 秋月の歴史 後藤元一・工藤卓・宮本雅明・齊藤恭助・阿部雄一郎編『秋月』 甘木市教育委員会  
 田中裕介 1996 女狐近世墓地—大分市高崎所在女狐集落近世共同墓地の調査。『九州横断自動車道関係調査報告書』, 5. pp.39-271。  
 都出比呂志 1989 古墳時代の中央と地方「古代史復元」, 6 講談社  
 時津裕子 1998 近世以降の墳墓の型式学的研究—筑前秋月城下を中心として。『人類史研究』, 10: 74-96。  
 時津裕子 2000 近世墓にみる階層性—筑前秋月城下の事例から—『日本考古学』, 9: 97-122  
 西川希水 『秋月藩家代人名列』, 『秋月諸氏分限』, 『秋月諸氏以下共名付』  
 森三太夫 『秋月役々分限』

第1表 各墓域の総合情報

墓域名	所在寺院	存続期間	家格等	役職等	石高/扶持高	墓石形態	サイズ	戒名
黒田家A	古心寺	1635～1892年	藩主一族	歴代藩主と正室	—	特大笠付円中心、五輪形、宝夾印塔	250cm程度(笠) 110cm程度(五)	院殿号 大僧十/大姉
黒田家C	古心寺	1677～1888年	藩主一族	藩主の子女と側室	—	笠付型、自然石	90～150cm	院殿号・大姉、 大童子/大童女
宮崎家G	長生寺	1625～1773年	馬廻(小書院)	家老を輩出	2200～2500石	自然石、笠付型	160～200cm 80～130cm	院・居士/大姉 中心
宮崎家E	長生寺	1796～1901年	馬廻(小書院)	鉄砲頭、馬廻頭、中老	200石	自然石、笠付型	50～110cm	院・居士/大姉 中心
林家	長生寺	1690～1849年	馬廻(小書院 ～大書院)	鉄砲頭、御側頭、勘定奉行、 御納戸頭	100～120石	自然石、欄形、板 碑形、笠付型若干	60～110cm	居士/大姉 居士/信女
木村家	長生寺	1699～1918年	馬廻(大書院)	鉄砲頭、馬廻頭、中老	250石	板碑形、自然石、 欄形	50cm台が最盛 80～120cm	居士/大姉 居士/信女
磯家	長生寺	1671～1932年	馬廻(大書院)	勘定奉行、郡奉行、日付頭、御 川役等	100石	自然石、欄形	50～100cm	居士/大姉 居士/信女
遠山家	長生寺	1734～1908年	無足～馬廻 (大書院)	勘定奉行、郡奉行等、御武蔵 御預等、藩校兵学教官を兼任	90～110石	実頭・台座角柱が 大半、自然石若干	50～80cm 60cm台が最盛	居士/大姉 中心
加藤家	長生寺	1802～1884	無足列～御納 戸列	西洋外科医	110人扶持	欄形	60cm台	居士/大姉 中心



第1図 各墓域の実測図 (S=1/50)

# 山陰における近世墓

中森 祥

(鳥取県教育委員会文化財課)

## 1. はじめに

山陰両県においては近世墓の調査例が多いとはいえない。管見の限り、鳥根県は16遺跡、鳥取県では9遺跡にすぎない。このうち数基から10基程度がまとまって検出されている例と、50基以上の大規模な事例とがある。ここではとくに、まとまって近世墓が検出されている遺跡を中心に、墓壇形態、墓地形成、そして墓から出土する遺物について比較検討を行なっていく。

## 2. 墓壇形成と墓壇形態の変遷 (第1図5～7)

100基以上がまとまって検出されている清水大日堂裏古墓(安来市)、門前第2遺跡(大山町)、松原小奥遺跡(鳥取市)をみると、いずれも16世紀代(後半以降)に造墓が開始し、近現代まで墓地として営まれている。その在り方をみると、門前第2遺跡でははじめ丘陵の西縁部に列状に展開するが、その後18世紀(Ⅱ期)になって東及び南側を溝で区画し、その中で造墓されるようになる。ここでは必ずしも規則的な配列は見いだせず、切り合いも甚だしい。松原小奥遺跡もⅠ期(16～17世紀)からⅡ期(18世紀代～近世末)への墓壇形態および配列については同様で、やはりⅡ期以降の規則的な配列はない。一方清水大日堂裏古墓AⅠ区西(80基)では、各墓の切り合いがほとんどない整然とした配列である。細い丘陵上を平坦につくりだし、東・北・南の各辺は溝はないものの、ほぼ直線的に区画されていることが看取できる。また半坂古墓群2区では、丘陵中央部にある古墳状高まりの裾部周囲に弧状をなして墓が連なるといった特殊な配列をしている。いずれにせよ、18世紀になって墓数が増加することについては共通し、墓域の形成には地域的な特色が現れてくることが考えられよう。

墓壇形態の変遷について松原小奥遺跡では、Ⅰ期には長方形で長径-短径比が概ね4:3(CⅠ型)の墓壇がつくられる。このタイプは続くⅡ期にも若干あるが、径の長短比が小さくなるCⅡ型が主流になっていく。またこれはCⅠ型に比べ深いものが多い。そしてⅡ期になると、方形(B型)、円形(A型)墓壇が出現し主流となり、前者はそのままⅢ期(近代以降)以降も継続する。この傾向は門前第2遺跡も同様であるが、ここではⅡ期について18世紀中葉～後葉、19世紀代の2時期に細分され、A・B型が19世紀代から主体となることが判明している。またC型については深淺2種があり、前者がⅠ～Ⅱ期に主となるのに対し、後者はⅡ期後半から出現する。浅いタイプは松原小奥遺跡では確認されず、地域的な差異が看取できる。

## 3. 墓壇内出土遺物の様相

20基前後以上の墓が検出された遺跡において、墓から出土する遺物の出土(副葬)率についてみると、古市遺跡(鳥取市、14.4%)、板屋Ⅱ遺跡(飯南町、20%)が2割以下と低く、続いて5割前後の遺跡として田住桶川遺跡(南部町)などがある。大塚岩田遺跡(大山町)、石州府古墓群(米子市)、陰田古墓群(同)、清水大日堂裏古墓の4遺跡では65～70%とかなり高い。陰田古墓群はA群(17世紀前半)は36.0%と低いが、B群(18世紀以降)では84.2%と非常に高率になる。またA群とほぼ同時期の谷ノ奥遺跡(松江市)では28.6%となっておりやはり低い。出土率が5割以上の諸遺跡がいずれも18世紀以降に比定されることから、この時期から副葬品をもつものが増加する傾向が窺えよう。

筆者は山陰両県の近世墓から出土する副葬品の組合せを検討し、銭貨・刃物類・煙管という3点が基本的なセットとなる可能性を指摘し、それを死出の旅立ちのための「トラベル・セット」と規定した(中森2008、第1図3・4)。こうしたセットは鳥取県西部(伯耆特に西部)において顕著に見いだ

せ、これに、西接する出雲東部と隠岐では、やや類する傾向が見て取れる。一方、鳥取県東部（因幡）では古市遺跡、松原小奥遺跡併せて400基を超える墓が検出されているにもかかわらず、非常に副葬される率が低い。また、出雲西部から石見にかけても因幡同様、副葬率が低くなっている。

検出事例の多い西伯耆のうち門前第2遺跡では、銭貨が出土する事例は検出数の半分以上を占める。2点セットでは銭貨と刃物、銭貨と煙管がそれぞれ10例ずつ、3点でも銭貨・刃物・煙管のセットが10例ともっとも多く、この3点を基本としていることが窺える。また2点セットでは1例しかなかった毛抜が、3点では6例、4点のうちが1例と副葬の費目が増えるにつれてそこに組み込まれている。この遺跡から直線で2.5kmほどに位置する大塚岩田遺跡では、銭貨と刃物のセットが多く（16例）、これを含め2点セットが26例（30.6%）と主体となる。一方3点セットの事例が3例（3.5%）と少ない。両遺跡の副葬品は同じような構成であるので、概ね同様の習俗を有していたと考えられるが、各セットにおける事例数の多寡はそれぞれの集落の性格を反映した可能性も考えられよう。こうした3点以上をもつものは門前第2遺跡で17例（12.9%）であったが、陰田古墓群では9例（23.7%）と割合が高い。特に、先にみた4点の組合せが5例もあり、このセットが強く意識されているといえよう。また、同遺跡は銭貨のみの事例も12例と多いが、一方で2点セットが4例（10.5%）と少ない。このことから4点ないし3点セットを、副葬品の一つの基本としていたといえる。

出雲において3点以上のセットは半坂古墓群で3例（5.4%、うち4点セット1例）、清水大日堂裏古墓群で1例（1.0%）しかない。他に前者では2点セット3例、銭貨のみが8例となっており、全体として副葬品は乏しい。後者では、3点が1例あるのみで、4点はない。しかし2点のものが13例（13.0%）とやや多く、大塚岩田遺跡と同様な傾向が窺える。さらに、東出雲から西にある各事例も2点セットがせいぜいで、銭貨のみを入れるものが主となっているが、それも石見ではほとんどみられなくなる。以上、大変雑ばくにもその様相をみてきたが、「トラベル・セット」としたものをもちつ事例は西伯耆から東出雲に限られ、さらに、各墓地群の性格によって異なってくる可能性がみえてきた。

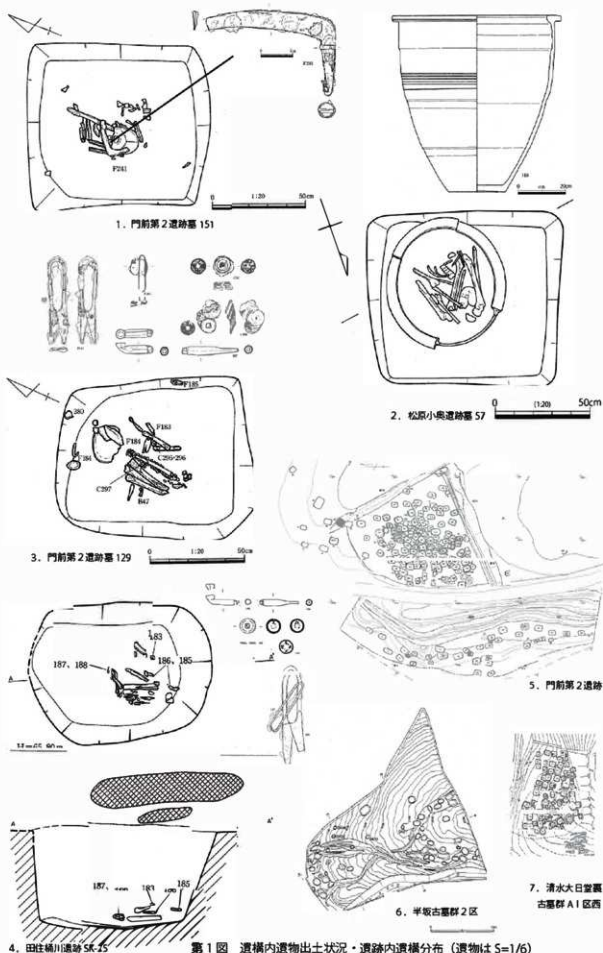
こうした副葬品の埋納方法を西伯耆における民俗事例にみると、納棺の際死者の首から頭陀袋をさげ、その中に六道銭や経文、生前の愛用品を入れたり、六道銭の穴に紐を通し、首からさげるとしている。同様なのは東伯耆でもあり、生前の愛用品の他、六道銭を棺内に入れたという。また、門前第2遺跡で鎌の出土が顕著であった。墓内埋土上位や頭蓋骨上に接着するような状態で出土する（第1図1）ものが多く、少なくとも銭貨や煙管などとは異なり、遺体より上位に置かれていたことが想像できる。実は、現在も墓上の標石横に鎌の柄を地面につきたて、刃先を外側に向ける事例があり、この習俗が近世まで遡ることが裏付けられた。

#### 4. おわりに

以上、ある程度まとまって検出された事例を中心に、山陰における近世墓の概要について検討してきた。墓塚と埋葬形態の変遷の関連性や、副葬された品々のセット関係など、ある程度共通するものがある一方、副葬品や品数の多寡、因幡における越前焼などを用いた甕棺（第1図2）や棺内に稲藁を敷き詰める事例など地域的な特徴も窺える。また、現代にまでつながる墓制の様相に関わる材料があることがわかり、今後さらに民俗学的事例も踏まえながら検討していくことが必要であろう。

#### 【引用・参考文献】（各報告書は割愛した。）

- 北 浩明・中森 祥 2007「中近世墓群の考古学的考察」『門前第2遺跡Ⅱ（高瀬田地区）』鳥取県埋蔵文化財センター  
坂田友宏 1995『神・鬼・墓—因幡・伯耆の民俗学研究—』米子今井書店  
中森 祥 2008『トラベル・セットの成立—山陰における近世墓の副葬品から—』『出土銭貨研究』第2号  
中森 祥 2010『松原小奥遺跡中近世墓の様相とその位置づけ』『松原古墳群Ⅱ・松原小奥遺跡』鳥取県教育委員会  
中森 祥ほか 2012『山陰の近世墓出土銭貨』『宮田進一氏追悼集』出土銭貨研究会・北陸信越出土銭貨研究会



第1図 遺構内遺物出土状況・遺跡内遺構分布 (遺物はS=1/6)

# 越前・若狭における近世墓の様相

村上 雅紀（越前町織田文化歴史館）

## 1. はじめに

本稿では、福井県内における近世墓の調査事例を埋葬方法・遺体収納容器・階層性といった視点から整理し、必要に応じて中世墓や近代の民俗事例も参考に、様相の把握に努めた。

## 2. 近世墓の様相

### (1) 埋葬方法

越前では、多賀谷左近墓所（金津町教委 1995）・三峯村墓地跡（鯖江市教委 2000）・伝無量寺跡（福井県教委 1975）で火葬骨が検出され、崇福寺（福井市教委 1997）から蔵骨器が出土した。また、乗泉寺遺跡（田中 1989）出土の越前焼甕や、明神山 18 号墳（福井県理文 2008）の土坑群も火葬墓に関わるものと考えられる。中世墓の様相をみると、13 世紀後半頃から 16 世紀代にかけて火葬墓が主流となり（赤澤 2006）、近世においても火葬が大勢を占めていたとみられる。その背景には、浄土真宗の広い普及がうかがえるも、法華宗などでは近年まで土葬を行っていた記録が残り（福井県 1984）、資料の蓄積を待って判断する必要がある。

若狭では、今市遺跡（美浜町教委 2007）・浜瀬遺跡（同志社 1966）で土葬骨が検出されている。中世墓の様相をみると、越前と同じく火葬墓の事例が圧倒的に多く（赤澤 2006）、土葬の出現時期が注目される。15 世紀から 16 世紀初頭に位置づけられる芳春寺山中世墓群では、①火葬墓単一、②土葬墓単一、③火葬・土葬併存といった多様な埋葬方法が認められる（福井県理文 2006）。土葬墓直上に火葬墓が造営される遺構や、火葬墓が土葬墓に切断される事例から、単に火葬から土葬に転換したのではなく、15 世紀頃から墓地内において土葬墓が増加するものの、いまだ火葬墓が併存し、16 世紀初頭にむけて土葬墓へ転換していく様相がうかがえる。

### (2) 遺体収納容器

越前では、多賀谷左近墓所・崇福寺・乗泉寺遺跡・三峯村墓地跡から蔵骨器が出土し、4 遺跡 5 例のうち 3 例が越前焼である。これらの越前焼甕・壺は火葬骨の納入に用いられ、土葬にともなう甕棺としては利用されていない。遺跡の時期比定が可能な乗泉寺遺跡や三峯村墓地跡をみると、17 世紀初頭から 18 世紀代を通じて越前焼を蔵骨器とする。蔵骨器に越前焼を採用するのは、生産地が近く比較的入手が容易であったことに起因するであろう。ただし、乗泉寺遺跡からは性格不明の唐津焼甕 2 点が発見され、多賀谷左近墓所では信楽焼壺が用いられる。

一方、蔵骨器を有しない伝無量寺跡や明神山 18 号墳では、茶甕に臥した遺骸を土坑内に直葬していたと考えられる。三峯村墓地跡の蔵骨器中からは鉄釘が検出されており、遺体を木棺に納めたまま茶甕に臥し、焼成後に火葬骨とともに木棺の残片を蔵骨器に納めた様子が復元できる。火葬の採用と木棺の使用が併存し、必ずしも木棺は土葬と直結するわけではない。

若狭では、蔵骨器の使用は認められず、土葬にともなう木棺および座棺の利用が顕著である。今市遺跡では座棺と方形木棺、浜瀬遺跡では長方形木棺と座棺が検出され、日引遺跡（若狭歴史 1987）では土坑の形状とシュロ製紐の遺存から座棺の存在が想定される。芳春寺山中世墓群から木棺と考えられる痕跡が検出されており、16 世紀初頭にはすでに木棺が使用されていた。遺体の収納方法をみると、今市遺跡 S K 2 で仰臥屈葬、浜瀬遺跡第 1 号墓で仰臥伸葬と異なり、多様な形態による埋葬が行われている。



第1表 越前・若狭の近世墓

No.	遺跡名	所在地	遺構名	時期	下部構造		葬法	遺物			備考	
					土坑平面形	収納容器		土器	銅銭	その他		
1	多賀谷左近墓所	あわら市柿原		寛長12 (1807)	石倉 宝篋印塔		信楽壺1	火葬?			戦国武将・多賀谷 左近三郎の墓所 遺構・遺物同なし	
2	崇福寺	福井市日ノ出					棺桶2 磁骨器1	土葬? 火葬?			不詳発見 遺構・遺物同なし	
31	乗泉寺遺跡	福井市笠谷町		16c末～ 17c初			越前壺1	火葬?			唐津壺(16c末～ 17c前)の性格不明 遺構同なし	
32	乗泉寺遺跡	福井市笠谷町		17c後			越前壺1	火葬?			唐津壺(17c中～後) の性格不明 遺構同なし	
4	三峯村墓地跡	越前市上戸口町	D83	18世紀	角礎?	不整形	越前壺1	火葬			鉄釘	
5	仏無量寺跡	南越前町上平吹	ビッド3			円形		火葬	土師皿1	寛永通宝3	土師器片あり 遺構・遺物同なし	
61	明神山18号墳	敦賀市坂ノ下	1号土墳			不整形		火葬?		寛永通宝1	覆土中より炭化物 近世墓か	
62	明神山18号墳	敦賀市坂ノ下	2号土墳			楕円形		火葬?			覆土中より炭化物 近世墓か	
71	今市遺跡	美浜町佐田	SK1			円形	座棺	土葬	土師皿 銅片1		墓材上に重し石	
72	今市遺跡	美浜町佐田	SK2			隅丸方形	方形木棺	土葬			仰臥屈葬	
81	浜瀬遺跡	おおい町大高宮留	第1号墓			隅丸長方形	長方形木棺	土葬	土師皿3		鉄製短刀 1 鉄鏝2 鉄製品1	墓材上に重し石 仰臥伸葬
82	浜瀬遺跡	おおい町大高宮留	第2号墓			楕円形	座棺	土葬			仰臥屈葬 第1号墓を切所	
91	日引遺跡	高浜町日引	方形石組		方形石組						火葬場か	
92	日引遺跡	高浜町日引	集石A		方形集石	隅丸長方形	座棺?	土葬?			シュロ紐	
93	日引遺跡	高浜町日引	集石B		方形集石						棺台か	
94	日引遺跡	高浜町日引	集石C		円礎集石					寛永通宝1		
95	日引遺跡	高浜町日引	経塚集石	文化8 (811)	石塔 方形集石						経石? 850	
96	日引遺跡	高浜町日引	六角石礎	天保3 (832)							光明真言路	

### (3) 階層性

越前では、多賀谷左近墓所で石籠および宝篋印塔が用いられており、福井藩の家老であった多賀谷左近の家格が示される。石籠の類例は、福井市重立町日吉神社の朝倉大炊助景賢石殿（1556）、坂井市三国町滝谷寺の開山堂（1572）、和歌山県高野山奥の院の越前松平家石廟などがあり（金津町教委1995）、いずれも高位の武士や大寺院によって造立された。一方、他の遺跡では石塔の使用は認められず、地表上に墓標を有しない。副葬品をみても、伝無量寺跡から土師器皿1点と寛永通宝3点が、明神山18号墳1号土壙から寛永通宝1点が出土しているのみで、明確に階層差を示す資料はない。

若狭では、両墓制に通有の事例として「詣り墓」の墓標に石塔が使用される。反面、「埋め墓」には礎のほか永続的な墓標を用いず、発掘された近世墓においても地表上に明確な墓標はない。また、墓の下部構造をみても土坑内に収納容器を埋納するのみで、石塚や石室などの施設は認められず、遺構の構造に階層性の差異を見だしがたい。副葬品は、今市遺跡SK1で土師器皿片1点、浜瀬遺跡第1号墓で土師器皿3点・鉄製短刀1点・鉄鍔2点・不明鉄製品1点、日引遺跡集石Cで寛永通宝1点が出土した。浜瀬遺跡第1号墓は他の遺構に比べて副葬品が豊富であり、木棺の内外に鉄製品が配されるなど、被葬者が丁重に埋葬された状況を看取できる。報告者が指摘するように、村内の有力者の墓であろうか（同志社1966）。

### (4) 両墓制の成立時期

若狭における墓制の変遷を考えると、両墓制の問題を避けることはできない。両墓制とは、「死体埋葬地点に施された一連の墓上装置の集合」と、「それに対応し死者供養のために建てられた仏教式石塔墓塔の集合」の両墓から構成される墓制である（新谷1991）。一般には、「埋め墓」・「詣り墓」と呼称される二つの形態の墓地を有し、北陸では福井県三方上中郡から大飯郡にかけての地域に集中する。両墓制の分布と宗旨との関係も指摘されており、曹洞宗・臨済宗といった禅宗系宗派との関連が深い（佐藤1977）。

民俗事例をみると、両墓制の分布域と土葬の分布域は大部分で重複し（福井県教委1981）、両墓制の展開と土葬の普及には密接な関連があると考えられる。両墓制の成立時期は事例ごとに多様で、京都府京都市右京区（旧 京北町）では永正5（1508）年記録の宝篋印塔の存在から、中世末期にまでさかのぼることが指摘されている（竹田1966・1968）。では、若狭において両墓制が成立するのはいつであろうか。

御嶽貞義は、山田中世墓群の検討を通じて、火葬骨の埋葬（中世墓）から石仏の設置（墓標遺構）へと墳墓造営の目的が漸次変化するものと考えた。そして、地表上に石仏を立て土坑内に火葬骨を納める形態をその過渡期として捉え、「詣り墓」的な墓標遺構の出現をもって、14世紀末～15世紀初頭には両墓制が成立したとする（御嶽2004）。

先にみたように、両墓制の展開と土葬の普及には大きな関連がうかがえ、「詣り墓」に近い形態の墓地の出現をもって両墓制の成立と捉えることは、やや性急である。両墓制の成立背景に死者の汚れに対する観念の変化があったと考え、詣り墓の造営と土葬の採用が両墓制の成立にとっての重要な要素となる。芳春寺山中世墓群の事例より、若狭では火葬と土葬が併存し、次第に土葬へと転換していくことを考慮すると、少なくとも両墓制の成立時期は16世紀初頭以後と考えられる。

### 3. まとめ

越前・若狭における近世墓のあり方は、対照的な様相であった。すなわち、越前では埋葬方法に火葬を採用し蔵骨器の使用例が認められるのに対し、若狭では土葬を主流に木棺および座棺に埋葬する事例が多い。その変遷は明確でないが、ほぼ近世を通じて近代にまで及ぶと考えられる。中世墓の事例をみると、若狭では16世紀代に土葬が定着し両墓制の萌芽も認められるため、この時期に墓制上の画期を設定できる。

一方、近世墓に表出される階層性の問題については、多賀谷左近墓所を除き墳墓の形態や墓標に明確な差異はない。また、副葬品は土師器皿と寛永通宝を基本とし、浜瀬遺跡第1号墓出土の5点の鉄製品に注目すると、集落の墓地内においてもある程度の階層差の存在が認められる。

今後、近世墓の事例が飛躍的に増加するとは考えにくく、近世墓地における石塔の変遷や民俗事例の検討を通じて、様相の把握に努めたい。

### 【引用・参考文献】

- 赤澤徳明 2006「福井県」『中世墓資料集成 -北陸編-』中世墓資料集成研究会  
金津町教育委員会 1995「金津町埋蔵文化財調査概要」  
佐藤米司 1977「葬送儀礼の民俗」岩崎美術社  
新谷尚紀 1991「両墓制と他界観」吉川弘文館  
竹田聰洲 1966「両墓制村落における詣墓の年輪（一）」『仏教大学研究紀要』49 仏教大学学会  
竹田聰洲 1968「両墓制村落における詣墓の年輪（二）」『仏教大学研究紀要』52 仏教大学学会  
田中照久 1989「福井県丹生郡清水町笹谷乗泉寺遺跡の陶器について」『福井考古学会会誌』第7号 福井考古学会  
同志社大学文学部 1966「同志社大学文学部考古学調査報告第1冊 若狭大飯」  
福井県 1984「福井県史」資料編15 民俗  
福井県教育委員会 1975「北陸自動車道関係遺跡調査報告書」No.6  
福井県教育委員会 1981「福井県民俗分布図」  
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2006「福井県埋蔵文化財調査報告 第92集 芳春寺山中世墓群」  
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008「一般国道8号敦賀バイパス関係遺跡調査報告書 第1集 坂ノ下遺跡群」  
福井県鯖江市教育委員会 2000「鯖江市埋蔵文化財調査報告第2集 三峯村墓地跡」  
福井県立若狭歴史民俗資料館 1987「日引遺跡」  
福井市教育委員会 1997「福井城跡Ⅲ」  
御嶽貞義 2004「大飯町山田中世墓群における両墓制の出現に関する予察」『北陸石造物研究会設立準備連絡誌』vol.1  
北陸石造物研究会設立準備会  
美浜町教育委員会 2007「美浜町埋蔵文化財調査報告第6集 美浜町内遺跡発掘調査報告書Ⅱ」

# 金沢城下の近世墓地

庄田 知充（金沢市埋蔵文化財センター）

## 1. はじめに

金沢城下町居住者の埋葬地は、城から南西に約3.5km離れた野田山墓地や、卯辰山麓・寺町・小立野および城下北部の寺院群等に分布する。本稿では、浅野川右岸の低湿地に位置する久昌寺境内墓地および、野田山中腹の加賀八家横山家墓所の調査事例を紹介する。

## 2. 久昌寺遺跡（金沢市 2004）

城下北東縁辺部の堀川町にある久昌寺（曹洞宗）は、慶長15年（1610）に二代藩主前田利長の正室玉泉院の生母の菩提所として本願寺東別院東南に建立された。当地に移転したのは17世紀中～後半とみられる。久昌寺を菩提寺とした藩士は、長瀬家（千石）を最高石高とする中、下級武士層だった。発掘調査では、近世～近代の292基の墓が検出された。

### （1）埋葬施設の種類（第4図）

埋葬施設は、土葬の方形木棺（A類）・円形木棺（B類）・甕棺（C類）、火葬の蔵骨器（D類）に分類され（増山仁 1997）、A～C類は、さらに木郭の有（Ⅰ類）・有（Ⅱ類）で細分される。A類は長方形の板を釘打ちで組み箱形の棺としたもので、棺の外側に木製の「記」を打ち付けたものがある。B類は結桶を棺としたもので、円形の蓋には「記」や金剛経、「南無阿弥陀佛」、「迷故三界城」などの経文、桶側面に「前」・「後」・「一」などの文字が墨書されている。C類は越前甕を棺としたもので、木製の円形蓋に「迷故三界城」と経文を墨書した事例がある。D類は小型の越前甕・肥前甕・土師器壺・曲物を蔵骨器として埋納したもので、土師器皿や土製の蓋をかぶせている。

### （2）埋葬施設の変遷（第2図）

墓地は約1.5mの盛土を介して上層（17世紀後～18世紀代）と下層（18世紀末～19世紀初）に分離される。主体となる埋葬施設が下層では円形木棺や甕棺だが、上層では方形木棺となる。上層では甕棺墓も木郭に入れ、火葬墓も方形に区画するなど、平面形が円形から方形に変化する。

### （4）副葬品と葬送儀礼（第3・5～10図）

円形木棺墓や甕棺墓の副葬品は六道銭と数珠、漆器碗（3～4個一組）、箸の組合せが多く贈が加わるものがあり、量が多い。また、柳、陶磁器碗、土人形、舟形の金属・土製品等もみられる。方形木棺墓では六道銭や土人形以外の副葬品が少なく、六道銭が省略される傾向もある。火葬墓では多くの場合副葬品がない。六道銭は円形木棺墓61%、甕棺墓59%、方形木棺墓16%、火葬墓6%と、古い墓ほど埋納率が高い。鉄銭、念仏銭、銭を模した木製品（表「寛永通宝」裏「文」の墨書）が六道銭として埋納されることがある。時代を下るほど薄葬の傾向が強い。方形棺の蓋や底板に経帷子か紙の経文が鏡文字として転写していた事例がある。葬送儀礼に使用した柿経や棺飾りが共存する事例もある。

### （3）墓道と墓の配置

埋葬施設の配列から、墓道が存在していたと考えられる空間があり、その両側に墓が並ぶ。下層から上層への移行に際しては、基本的に同一場所で造墓が継続しており、墓域が継承されていると考えられる。上層墓地においては、下層で空白域だった北縁部に墓域が拡張することから、この時期に造墓需要が増加したと考えられる。当時は土葬を基本とする個人墓だったことから追葬スペースが不足し、新たに盛土を行うことで垂直方向に造墓スペースを確保したと考えられる。



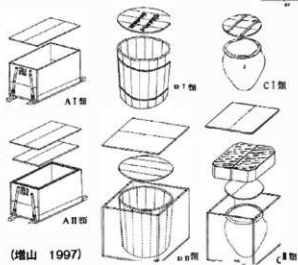
久昌寺遺跡の城下と遺跡の位置



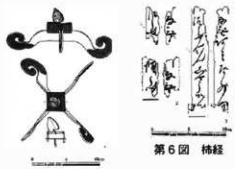
瓦木通穴を模した木製母板  
第3図 六道銭の特殊な例



第2図 久昌寺遺跡 遺構配置図



第4図 埋葬施設（土葬墓）の分類



第5図 棺飾り

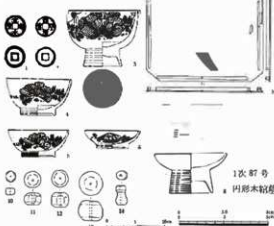
第6図 柩



第7図 陶絵蓋高



第9図 舟形の鈴（金属製）



第10図 副葬品の組み合わせの一例

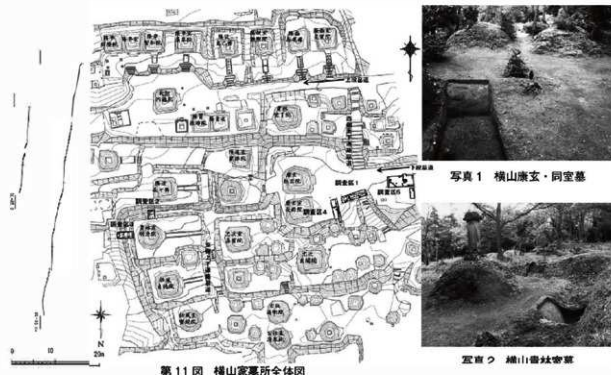
### 3. 加賀八家横山家墓所（金沢市 2012）

横山家は元禄3年（1690）以降、代々世襲で藩の執政を担当した年寄衆の家柄（加賀八家）のひとつで、3万石を禄し、歴代当主の内3名が金沢城代を勤めるなど藩政に重要な役割を果たした。墓所は野田山墓地の中腹にあり、2代長知から13代までの当主・室、子女が葬られている。

発掘調査は、横山家墓所内の康玄（正保二年（1645）没）墓およびその室〔明暦元年（1655）没〕墓と貴林室（五代任風娘・正徳五年（1715）没）墓の基壇・周溝および横山家所蔵の絵図に「御帳附小屋」と記載される平坦面で実施した。

康玄・同室墓では、東西約16m、南北約17mの長方形基壇の後方において、康玄墓と同室墓の墳丘を南北に併置している。墳丘は約6m四方の方墳の上に円墳をのせた二段築造とし、墳丘前面裾部には方形の張り出しが設けられている。康玄・同室墓ともに墓石は見られない。康玄は、没年から本墓所における最初の埋葬者と考えられ、野田山参道から横山家墓所に至る主要墓道である下段墓道の正面突き当たりには築造されている（ちなみに上段墓道正面突き当たりは、康玄の父2代長知墓となっている）。貴林室墓では、東西約15m、南北約9mの長方形基壇の後方に、約6m四方の平面形が崩れた方墳を配置している。ともに基壇の三辺（山側・前面・背面）に区画溝がある。上下方向の区画溝は各墓で独立しておらず縦に連続していることから、区画溝は、各墳墓および墓所全体の境界としての役割のほか、排水の機能を併せ持っていると考えられる。

御帳附小屋跡では明確な建物痕跡を確認できなかった。建物構造は検討課題だが、主要墓道の墓所入口脇の空閑地であることから、葬礼または墓参祭祀に関わる臨時施設のための用地と考えられる。



#### 【参考図書】

石川県図書館協会 1974『加越能寺社由来 上巻』

金沢市 2004『久昌寺遺跡』／金沢市 2012『野田山・加賀八家墓所調査報告書』

増山仁 1997『金沢城下における近世墓—久昌寺墓地を中心として—』『西日本近世墓の様相』関西近世考古学研究会

# 石川県における近世墓

和田 龍介（公益財団法人石川県埋蔵文化財センター）

## はじめに

石川県では、約40箇所の近世墓及び関連遺構が確認されており（平成25年度現在、第1表）、本稿では石川県下の近世墓の発掘調査事例を、①寺院境内墓地、②農村部墓地に分けて紹介していく（野田山墓地及び庄田氏発表分を除く）。

## 1. 寺院境内墓地

金沢市経王寺遺跡、同宝町遺跡、同木ノ新保遺跡（久昌寺遺跡）、同金沢城下町遺跡（東兼六町5番地区）、珠洲市金峰寺墓地、同だいじょう寺畑遺跡がある。

### 経王子遺跡・宝町遺跡（金沢市小立野・宝町、第1図）

日蓮宗経王寺の旧墓地跡にあたる。加賀藩第3代藩主前田利常の生母寿福院により慶長10（1605）年に開かれ、寿福院と利常の庇護を受けた寺院である。平成9年に（財）石川県埋蔵文化財センターが実施した経王寺遺跡の発掘調査では、11基の墓坑と1基の灰塚（茶昆遺構群）が検出されている。

### 金峰寺墓地（珠洲市若山町、第1図）

曹洞宗金峰寺の墓地改修に伴い、珠洲市教育委員会が平成8年に発掘調査を実施した。寺は暦応元（1338）年開創と伝わり、歴代住職の墓域から5基の近世墓が検出された。長方形の板石で区画された墓域内に蔵骨器を埋設しており、肥前系陶器甕・土師質甕の蔵骨器が出土する。

### 金沢城下町遺跡（東兼六町5番地区）（金沢市東兼六町、第2・3図）

曹洞宗鶴林寺・雲竜寺の旧墓地跡であり、小立野台地東側の段丘崖を造成して営まれたものである。（公財）石川県埋蔵文化財センターが平成25・26年度に発掘調査を実施した。江戸時代中期以降に営まれた調査面では、越前焼甕を用いた甕棺（約30基）と、長方形棺の木棺（約40基）を検出した。火葬蔵骨器は、肥前系陶器甕に納められたものが数基確認できる。甕棺はすべて越前焼の大甕が用いられ、19世紀前半代のものが中心で、一部17世紀後半に遡るものもある。棺内には土人形・寛永通宝（六道銭）などが入る。木棺はほとんどが長方形棺で、座棺と考えられる。側板まで検出できたものでは、高さが約70cmであった。大半は鉄釘で造作されていたが、竹釘で造作されているものもあった。棺内副葬品は土人形をはじめ甕棺よりも多い印象がある。煙草盆が納められているものもあった。

### 木ノ新保遺跡（金沢市木ノ新保、第4図）

金沢城下町の北西端に位置し、墓域は絵図に残る屋敷割以前の、17世紀前半代に営まれていた。報告では、寺院境内墓地の可能性を指摘している。埋葬遺構は土葬墓20基、火葬墓7基、葬具埋納土坑1基が検出された。土葬墓は早桶（結桶・酒樽・曲物転用品含む）が19基、長方形棺（転用品？）1基である。

## 2. 農村部墓地

多様性があると考えられ、一律にこのカテゴリへ収めるべきかどうかという問題もある。現在のところ、墓域として発掘調査がおこなわれているのは白山市乾遺跡（上層遺構）のみで、単独検出の近世墓は総覧できていない。また火葬遺構に付属する近世墓としては、加賀市敷地天神山遺跡、金沢市額谷遺跡、能登町上町和住下遺跡で検出例がある。

### 乾遺跡（白山市乾町）

手取扇状地の扇尖部に位置する集落遺跡である。墓域は国道8号にほど近いB区で確認され、15世紀台から17世紀前半代まで営まれた168基の土坑群が墓坑である可能性が示された。埋葬施設や

上部構造等はまったく残っておらず埋葬形態は不明だが、土坑底面付近に礫原のような集石を持つものが多く見られる（石・坑内に被熱状況は見られない）。

#### 直江ボンノシロ遺跡（金沢市直江町、第4図）

金沢市の北西部の後背湿地に営まれた遺跡で、区画整理事業によって移転した集落墓地の一部が調査対象地に含まれており、合計12基の近世土葬墓が検出された。年代のわかるものについては18世紀以降の所産と考えられる。「鍋振り葬」が2基確認された。

### 3. 石川県の近世墓

#### ① 城下町と農村

大名墓地を除き、石川県で発掘調査に至った近世墓は13遺跡を数える。うち城下町は5遺跡、農村は6遺跡、寺院境内2遺跡である。城下町の近世墓地はいずれも寺院境内墓地であり、城下町墓地の普遍性をうかがうことは難しいかもしれない。金沢城下町の都市墓といえる野田山墓地は、藩主から町民まで様々な階層の墓地を含んでおり、その形成過程や詣墓（家老・人持等上級武士層に見ることができる）など、城下の墓制を考える上で重要な墓地である。

一方で農村墓地は、火葬場＋墓地というパターンと、墓地のみが検出されるパターン、火葬墓のみの3パターンが存在することが予測できる。これは火葬と土葬という葬法による差異を反映するものといえ、火葬を通行とする浄土真宗の地域的あり方との関連性が今後の課題といえる。

#### ② 寺院境内墓地における埋葬施設の変遷

17世紀前半：早桶主体（木ノ新保遺跡）

17世紀後半～18世紀：早桶主体、木棺が定量用いられる（久昌寺遺跡）。17世紀末までには越前焼甕棺が用いられ始める（野田山墓地、兼六町5番地区）。

19世紀～：木棺主体、早桶激減（久昌寺遺跡）、甕棺は選択的に用いられるか。

火葬墓は有機質容器（曲物等）と蔵骨器、容器なしの3通りが確認できるが、変遷等は不明である。火葬そのものは17世紀前半にすでに認められ、19世紀段階では増加する傾向も見られるが、依然主体は土葬と考えられる。

城下町寺院境内墓地における甕棺は近世を通じて越前焼が用いられているのが特徴である。火葬蔵骨器については越前焼の他に、肥前系陶器甕を用いているものもある。土師質系の蔵骨器については、年代の特定が難しく、今後の課題としたい。

#### 【参考文献】

- 江戸遺跡研究会編『墓と埋葬と江戸時代』（吉川弘文館2004）  
佐藤弘夫『死者のゆくえ』（岩田書院2008）  
谷川章雄『江戸の墓制・葬制の考古学的研究』（早稲田大学学位論文（博士）2010）  
柿田祐司・田村昌宏・滝川重徳『九泉』（財団法人石川県埋蔵文化財センター『石川県埋蔵文化財情報 創刊号』1999）  
同『九泉Ⅱ』（財団法人石川県埋蔵文化財センター『石川県埋蔵文化財情報 2号』2000）  
同『九泉Ⅲ』（財団法人石川県埋蔵文化財センター『石川県埋蔵文化財情報 3号』2001）  
増山仁『金沢城下における近世墓—久昌寺墓地を中心として—』（関西近世考古学研究会『西日本近世墓の諸様相 第9回関西近世考古学研究会大会発表要旨』1997）  
石川県立埋蔵文化財センター『敷地天神山遺跡』1987  
同『金沢市顔谷遺跡』1998  
（財）石川県埋蔵文化財センター『金沢市 経王寺遺跡』2002  
同『金沢市 木ノ新保遺跡』2002  
同『珠洲市 だいじょう寺畑遺跡』2005  
同『白山市 乾遺跡』2010  
金沢市『野田山墓地』2003  
同『石川県金沢市 直江南遺跡・直江ボンノシロ遺跡・直江ニシヤ遺跡・直江西遺跡』2012





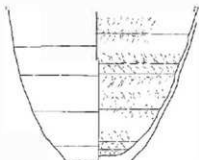
第2・4調査区  
(S=1/500)  
黒ゴシック番号が墓坑



第11号墓 (S=1/60)



第13号墓出土越前焼 (S=1/12)



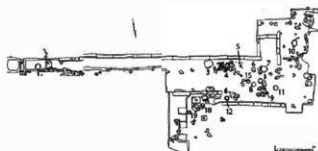
第12号墓嬰棺 (S=1/12)



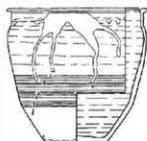
第13号墓出土土人形 (S=1/6)

教王寺遺跡

金峰寺墓地



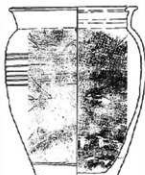
住職墓域 (A区) 全体図 (S=1/400)



1号墓



2号墓



11号墓



4号墓

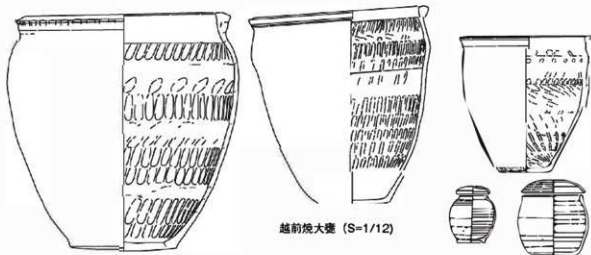
甗骨器 (S=1/8)



第1図 教王寺遺跡、金峰寺墓地

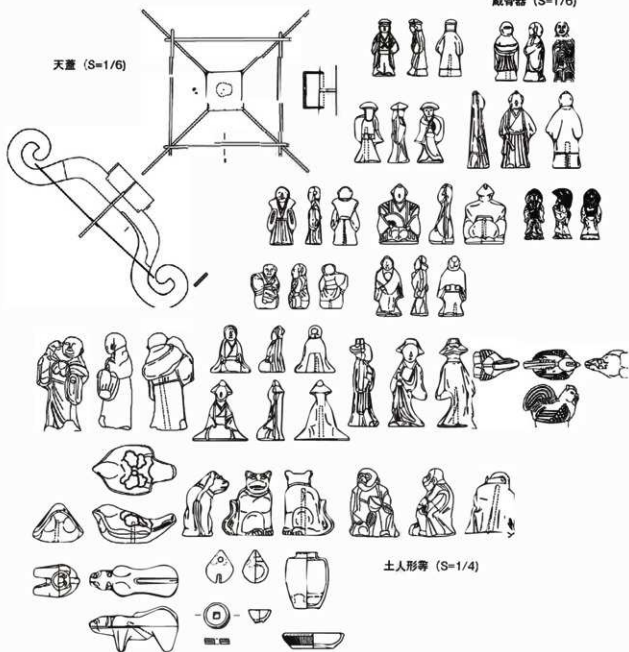


第2図 金沢城下町遺跡（東兼六町5番地区）鶴林寺調査区



越前焼大甕 (S=1/12)

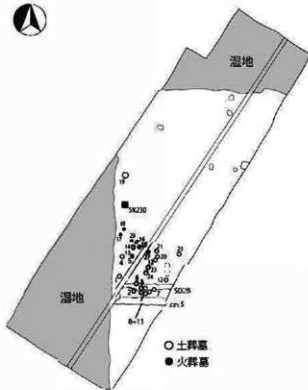
蔵骨器 (S=1/6)



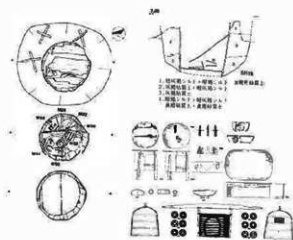
天蓋 (S=1/6)

土人形等 (S=1/4)

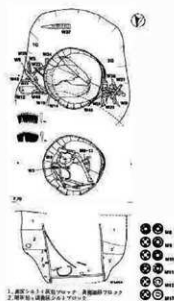
第3图 全沢城下町遺跡 (東兼六町5番地区) 出土遺物



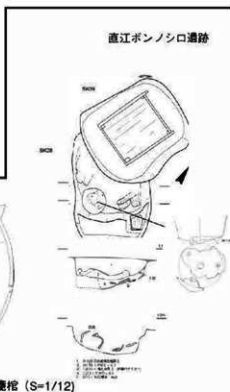
第 I 面遺構配置図 (S=1/1,000)



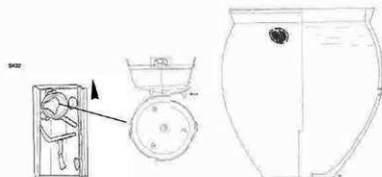
SH016 (遺構 1/40、遺物は任意)



SH01 (遺構 1/40、遺物は任意)



SK17 甕棺 (S=1/12)

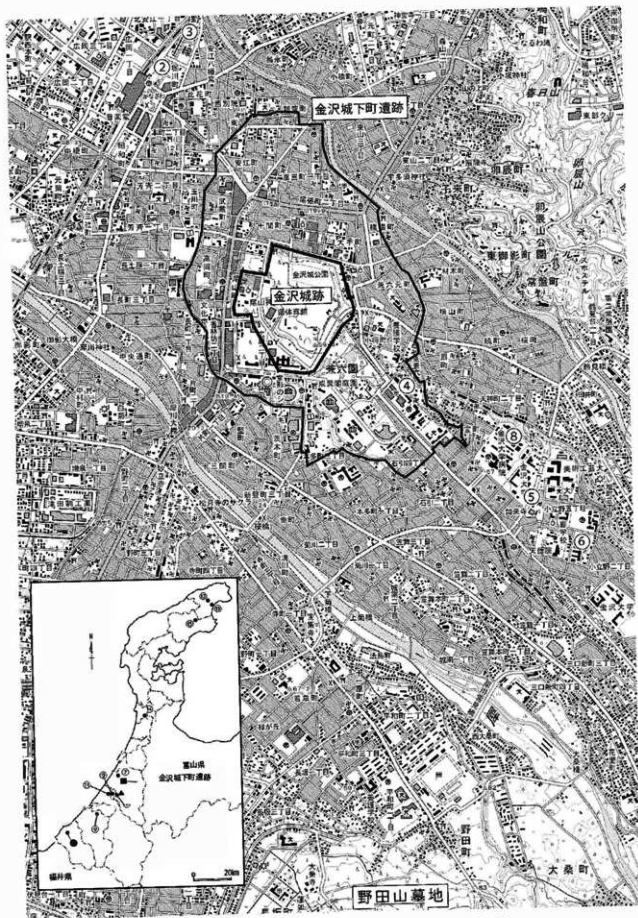


第 4 図 木ノ新保遺跡・直江ボンノシロ遺跡

第1表 石川県の近世墓遺跡一覧

遺跡番号	遺跡名	市町名	所在地・詳細	年代	火葬遺構	土葬墓	火葬墓	発掘調査経緯	備考
	野山山墓地	金沢市 野町		17世紀～	?	○	○	2001年度市立倉庫調査、2004～2011年度市立倉庫調査（副倉庫、知事大倉庫等）	金沢市下町の都市部。加賀藩主直轄の山荘。18世紀には茶屋敷・町人墓が併存していた
①	104700 朝日遺跡	金沢市 朝日町		19世紀～	1	0	2	1995年度発（歴史セ）発掘調査、1999、2000年度発（財）発掘調査	藩主直轄の火葬場及び付随の火葬墓
②	120001 水の森保護遺跡	金沢市 水ノ森保・堀川町・北町・江		17世紀後半	0	20	7	1993年度発（歴史セ）	寺領地内墓地か
③	120002 水ノ森保護遺跡	金沢市 水ノ森保・堀川町・北町・安江		17世紀後半～	0	20	30	94～96年度市発掘調査	旧「久島寺遺跡」。寺領地内墓地2箇の遺構連携が確認
④	金沢市下町遺跡（茶屋敷1地区・浄土地区）	金沢市 東堀川町		17世紀後半～	0	○	○	2013～14年度発（歴史セ）	9世紀内陸地
⑤	133000 延王寺遺跡	金沢市 小立野・宝町		17世紀～	1	1	9	1997年度発（歴史セ）、1998年度発（財）発掘調査	旧延王寺墓地。火葬遺構は鎌倉～徳川までの墓関連構造物が分布
⑥	137000 小立野町丁遺跡	金沢市 小立野・宝町		17世紀中葉			○	2010年度市発掘調査	旧延王寺跡跡跡。4代藩主光圀墓、御山山へ移葬
⑦	144100 倉江ポンツウの遺跡	金沢市 倉江町		18世紀～	0	6	0	2009、10年度市発掘調査	農村集落。輪郭不明な墓
⑧	158300 宝町遺跡	金沢市 宝町				○	?	1997～2002、04～06、08、09、11年度市の発（金沢大学）発掘調査	旧延王寺墓地
⑨	1902005 三日月寺遺跡	野々市市 三日月町・二日月町		近世前半	0	4	0	2001～10年度発。11年度市、06～07年度発（財）発掘調査	13世紀末の火葬跡7基。近世前半のうち1基は輪郭不明
⑩	307100 朝日町宮田屋敷	小沢市 川田町			1	0	0	1990年度発（歴史セ）発掘調査	1658年朝日町村史（後鳥羽）に記された火葬跡。遺構は鳥野山天満宮に納められる
	611300 敷田天満山遺跡	加賀市 大聖寺町北・敷田		17世紀～	1	0	10	1979～81年度発（歴史セ）、1983年度市発掘調査	石組み火葬跡
	641200 行ノ瀨	加賀市 大聖寺地帯							
⑪	904500 敷田遺跡	石川市 敷田		17世紀前半～中葉	?		?	1995～11年度発（歴史セ）、92年度市発掘調査	19世紀初めから遺構する墓域は、火葬か遺構発掘調査
	262500 新潟県庁中倉庫群	七尾市 新町							2003年度市発掘調査
⑫	504500 丸いよ亭発掘遺跡	珠洲市 丸山の大宮		中世後半～近世	○	○	○	2003年度発（財）発掘調査	住居跡と確認
	506200 丸いよ亭発掘	珠洲市 丸山の大宮							
	506300 小堀寺	珠洲市 丸山の大宮							
	513500 正則院東院遺跡	珠洲市 正則町正則						1989～99年度市発掘調査	
	516902 大宮町中倉庫	珠洲市 三崎町新津						1989～99年度市発掘調査	
	518802 寺家山墓地	珠洲市 宝立町寺家						1989～99年度市発掘調査	
	519002 巨椋神社遺跡	珠洲市 宝立町巨椋						1989～99年度市発掘調査	
⑬	519702 金峰寺墓地	珠洲市 宝立町金峰寺		17世紀後半～	0	0	5	1996年度市発掘調査	住居跡を調査
	520202 滝尾集落墓地	珠洲市 滝尾町						1989～99年度市発掘調査	
	520302 北久保集落墓地	珠洲市 仁江町						1989～99年度市発掘調査	
	521602 養老寺集落墓地	珠洲市 養老町						1989～99年度市発掘調査	
	521902 水元集落墓地	珠洲市 養老町						1989～99年度市発掘調査	
	522302 熊鷹集落墓地	珠洲市 大谷町						1989～99年度市発掘調査	2ヶ所に分かれる
	523702 鶴成寺集落墓地	珠洲市 鶴成町武						1989～99年度市発掘調査	石灯台が遺構
	524002 藤崎集落墓地	珠洲市 鶴成町武						1989～99年度市発掘調査	
	524502 高野集落墓地	珠洲市 上野町寺社						1989～99年度市発掘調査、2002年度発（財）発掘調査	調査では墓域は確認できず
	525702 野々江神社墓地	珠洲市 野々江町						1989～99年度市発掘調査	
	526705 正則（ソウテン）寺遺跡	珠洲市 正則町正則						2001年度市発掘調査	
	527302 柳三郎墓地	珠洲市 丸山町東津						1989～99年度市発掘調査	
	527702 寺家山集落遺跡	珠洲市 三崎町寺家						1989～99年度市発掘調査	火葬中世寺領地内の墓地
	528302 守備集落墓地	珠洲市 高崎町						1989～99年度市発掘調査	
	529402 徳澤寺集落遺跡	珠洲市 徳澤町						1989～99年度市発掘調査	
	530000 北久保集落墓地	珠洲市 北久保						1989～99年度市発掘調査	古輪郭確認
⑭	717300 木田山遺跡	石川市 木田町		近世	1	0	0	2003～04年度発（財）発掘調査	三條川沿いの鎌倉火葬の遺構が確認
	1801500 地蔵堂中世墓地	穴水町 岩手澤							毎年10月15日に地蔵が祭
	1819700 小文軒集落	穴水町 小文							
	1819800 小伊勢集落	穴水町 伊勢							
	1919100 坂大島集落	鹿沼町 坂大							径1～3m、高2.0～1m、円筒形以上
⑮	1911200 上野町下遺跡	鹿沼町 上野		17世紀後半～	1	0	10	1993～94年度発（歴史セ）発掘調査	火葬の遺

※発掘資料・遺構・文化財地図（平成25年度版）。「年代」に近世「遺構類別」に属するものを持った「火葬遺構」3箇所については、近世前期遺構として補った。



第5図 石川県・金沢城下近世墓位置図 (S=1/1,000,000、25,000)

# 富山県における江戸時代の墓

田上 和彦（高岡市教育委員会）

## はじめに

富山県において江戸時代の墓は、遺跡の分布調査で報告されているが具体的な調査事例は少ない。しかし、近年加賀藩前田家二代前田利長の墓所や富山藩主前田家墓所、岩幹寺の石造物等の調査報告（高岡市教育委員会2008、古川ほか2010、立山町教育委員会2012）などから資料の蓄積がなされてきた。富山県においては大名墓、衆徒墓地、その他の3つに大別されるのでそれぞれの事例を挙げ、今後の課題を把握したい。

## 大名墓

富山県における大名墓は、国指定史跡加賀藩主前田家墓所（前田利長墓所）と富山藩主前田家墓所長岡廟所である。

高岡市教育委員会は平成18年度から平成19年度の2カ年にわたり前田利長墓所の詳細調査を実施し、金沢市の野田山墓地との比較を行っている（栗山2010、2013）。共通性は①墓域形態は野田山前田家墓所墳墓変遷Ⅰ期新相に該当し、造営年とも整合、②墳墓の基本構造は、土盛り整形の方形墳墓、③歴代藩主墓と同様に初代利家墓を上回らない規模で造営という3点が挙げられる。富山藩主前田家墓所は、富山城の北西にある長岡地区に所在し、長岡御廟所と呼ばれている。

富山市埋蔵文化財センターは、基礎調査を実施し加賀藩主墓との比較を行っている。長岡御廟所の造営は野田山Ⅱ期にあたるが、墓域・墓の位置はⅡ期には合致せずむしろⅠ期古相のあり方に近い。墳丘・墓の形式は外観、規模ともに大きく異なるが、盛土による方形墳丘や三段築成であることは類似する。加賀藩主墓の造墓原理が及んでいない要素があることから、墓の様式や、藩主とその他人物との差別化などの考え方を断片的に取り入れながら、富山藩独自の墓所造営を行ったのが実態ではないかと考えられる。

以上から、金沢市の加賀藩主墓所と高岡市の前田利長墓所を比較すると造墓原理を共通認識していることがわかる。しかし、加賀藩主墓所と富山藩主墓所と比較すると富山藩独自のものを構築したことが考えられる。

## 衆徒墓地

衆徒墓地は、富山県立山町の岩幹寺と芦幹寺にある。岩幹寺については、立山町教育委員会が平成21年から平成23年度にかけて石造物の悉皆調査を実施した。調査で確認した石造物は約1,500点にのぼり、中世から近代にいたる地域の造墓活動を詳細に記録した。芦幹寺については平成2年（1990）から平成4年（1992）に立山中宮寺跡における石造物の分布状況を調査したものである。

衆徒墓地では、被葬者とその石造物については差別化がみられることが石造物から読み解くことができる。僧侶以外にも村落を構成している成人や子供たちも埋葬されるようになる。宗教村落ということで、一般的な集落と性格が異なるのかもしれないが、集落の墓域形成の形を把握できたことは重要である。

## その他の墓地

その他の墓地として、高岡市移田野塚遺跡（高岡市教育委員会1993）、富山市正西寺墓地跡（富山県教育委員会2014）、富山市日俣地先近世墓地跡、本郷島地先近世墓地跡（富山県教育委員会2014）、魚津市印田近世墓（魚津市教育委員会1993）、黒部市堀切遺跡H区の塚（石田の石塔群遺跡）（黒部

市教育委員会 2012)、北堀切遺跡Ⅶ区の塚(黒部市教育委員会 2011)が挙げられる。その他の墓地では蔵骨器が出土しており、富山市正西寺墓地跡、日俣地先近世墓地跡、本郷島地先近世墓地、魚津市印田近世墓では蔵骨器の形が良く類似しており、火葬や素焼の皿で蓋をすることなどが共通する。堀切遺跡 H 区の塚では桶の中に成人女性が埋葬されている状況が確認されている。

#### 今後の課題と展望

富山県内の江戸時代の墓については、把握していない遺跡や成果があると考えられ、それらを丹念に集めることが必要である。

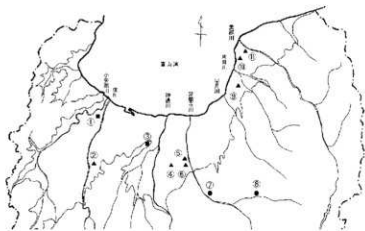
また、単一で検出された近世墓に関しては集落遺跡と関連させて考えて位置づける必要がある。今後、地域ごとの実態が明らかになるように努力したい。

#### 【引用参考文献】

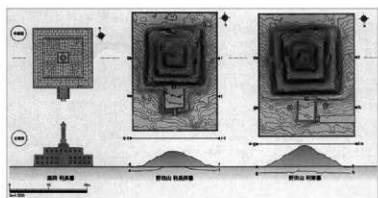
- 魚津市教育委員会 1981 『富山県魚津市印田近世墓 - 発掘調査報告書 -』  
栗山雅夫 2010 『3 加賀藩主前田家墓所における造墓原理』『立正大学考古学フォーラム 近世大名家墓所調査の現状と課題』  
栗山雅夫 2013 『お墓から読み解く前田利長公』『平成 25 年高岡市立博物館郷土学講習会資料』  
黒部市教育委員会 2011 『北堀切遺跡Ⅶ区の塚発掘調査報告書 - 国道 8 号バイパス建設工事にかかる埋蔵文化財調査 -』  
黒部市教育委員会 2012 『堀切遺跡 H 区の塚 (石田の石塔群遺跡) 発掘調査報告書 - 国道 8 号バイパス建設工事にかかる埋蔵文化財調査』  
高岡市教育委員会 1993 『移田野塚遺跡調査概報 - 平成 4 年度、中田土地区画整理事業に伴う調査 -』  
高岡市教育委員会 2008 『高岡市前田利長墓所調査報告』  
高岡市教育委員会 2011 『国指定史跡 加賀藩主前田家墓所 (前田利長墓所) 保存管理計画書』  
高岡市教育委員会 2012 『国指定史跡 加賀藩主前田家墓所 (前田利長墓所) 整備基本計画書』  
立山町教育委員会 2012 『立山信仰宗教村落 - 岩崎寺 - 石造物等調査報告書』  
富山県 [立山博物館] 1993 『立山中宮寺跡石造物分布調査報告書』  
富山県教育委員会 2014 『Ⅱ 近世墓地の調査』『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅲ』  
古川知明・野垣好史・小林高太 2010 『富山藩主前田家墓所長岡御廟所基礎調査報告』『富山市考古資料館紀要』第 29 号  
開野 達 2013 『岩崎寺の石造物と立山信仰』『平成 25 年度越中史観会研究発表大会要旨』



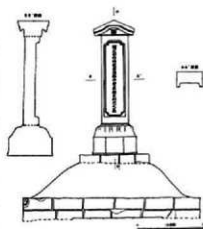
- ① 高岡市 前田利長墓所
- ② 高岡市 移田野塚遺跡
- ③ 富山市 長岡御廟所
- ④ 富山市 正西寺墓地跡
- ⑤ 富山市 日俣地先近世墓地跡
- ⑥ 富山市 本郷島地先近世墓地跡
- ⑦ 立山町 岩崎寺衆徒墓地
- ⑧ 立山町 芦崎寺衆徒墓地
- ⑨ 魚津市 印田近世墓
- ⑩ 黒部市 堀切遺跡H区の塚  
(石田の石塔群遺跡)
- ⑪ 黒部市 北堀切窪区の塚



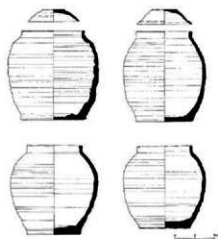
第1図 富山県における江戸時代の墓分布図



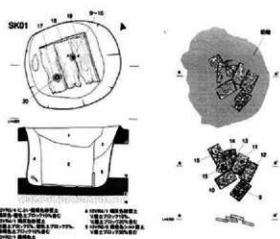
第2図 利家・利長墓 墳墓規模比較図



第3図初代利次墓側面立面図



第4図 印田近世墓 蔵骨器実測図



第5図 北堀切遺跡窪区の塚 一分全検出状況

## 新潟県における江戸時代の墓

相羽 重徳 (佐渡市世界遺産推進課)

### 発掘調査された近世墓

新潟県内で2009年段階において発掘・報告された近世墓は、40遺跡で792基ある。そのうち火葬墓は332基で、土葬墓は460基である(第1図)[相羽2009]。現状では、土葬墓は県北(阿賀野川以北)と県南(魚沼地域)及び山間部に多く分布する。一方、火葬墓は県北を除く平野部に多く分布し、特に新潟市周辺(新潟平野)が大半を占める。佐渡では調査事例が少なく、大勢はよく分からない。

本県の場合、開発に伴う緊急調査がほとんどである。つまり、開発が盛んに行われない地域においては、調査が及んでいないという分布論的課題がある。また、現代まで継続して残る墓地で、墓標があり被葬者ないしは所有者が判然としている場合、人道的観点から調査は行わず、改葬する場合はほとんどであるし、開発の対象となることは少ない。逆に言えば、発掘調査で見つかっている近世墓については、①学術調査、②墓標などが存在せず所有者が不明、③そこに埋葬地が存在することすら忘れられ、調査時に不時発見されたもの、などが多い。よって、検出された墓坑は必然的に墓地全体のほんの一部であったり、単発的な検出例が多くなる。そのため、墓域あるいは葬制の全容が詳らかとならず、畢竟、被葬者についての情報は極めて限られる。本県のこうした情報の欠落は、履歴の明らかな寺域や墓域の調査がほとんど及んでいないことにも起因している。

### 関連諸分野からみた近世火葬墓の分布

死者の葬法選択に当たって、火葬と浄土真宗及び地理的環境が密接な関係性を持つということは既に多くの先学により指摘されている。例えば民俗学では、井之口章次氏が火葬の普及している所を「都市とその周辺。そのほか主として真宗地帯」とし、具体的に新潟県では佐渡の対岸から西の地域と指摘している。また、「それ以外の広い地域では土葬の方があたりまえ」と言及している[井之口1977]。堀一郎氏は新潟県では「浜通り」と「平坦部」及び「信濃川流域」で火葬が多いと指摘している[堀1951]。

文献史学からは、寺島孝一氏が近世文書である『諸国風俗問状』及びその返答を紹介し、浄土真宗が盛んな新潟県において、門徒に火葬が多い点を指摘している[寺島2002]。

確かに現在(1983年調べ)、新潟県に所在する浄土真宗系寺院は、佐渡と県北(阿賀野川以北)を除く平野部に濃く分布し、山間部では希薄である。全宗派寺院に占める郡区別の浄土真宗系寺院の比率をみた場合でも「新潟」「西蒲原」「三島」「古志」「東・中・西頸城」といった平野部・沿岸部で過半数を占め、「佐渡」「岩船」「北・東蒲原」「北・中・南魚沼」「刈羽」といった山間部・県北・佐渡地域で30%を下回るなどその影響力が弱い地域であった。

つまりは、先述した発掘調査において火葬墓が優位に検出された地域に浄土真宗系寺院の分布が密であるように見える。一方で、「真宗地帯」＝「火葬」という短絡的な図式、即ち、火葬慣行が「特定宗派の規制力」に負うものであるかということについては、堀氏の指摘にあるように地下水位との関係や余剰地・材料との関連といった埋葬地の地理的要因[堀1951]は勿論のこと、埋葬者の生い立ちや死亡したときの状態など個々の埋葬事情を加味した考古学的観点から良く吟味・検証していく必要性が強く求められているといえよう。

## 火葬骨蔵器の選択性に関する傾向

本県では、火葬墓を検出した遺跡の発掘調査報告書において、実測図を併い報告されている骨蔵器は100点ある [相羽 2009]。

それらはすべて陶磁器(土器・瓦器含む)で、最多は肥前系陶器 61 点である。次いで越中瀬戸 7 点で、土師質土器 5 点、越前焼 3 点、信楽焼 1 点、高取焼 1 点、瓦器 1 点と続く。その他、産地不明陶器が 4 点ある。又、曲物や木箱、有機質の袋状のものも検出されている。なお、近現代の磁製骨蔵器は 17 点報告されている。陶磁器製容器はいずれも本県の近世遺跡で良くみられるやきもので、その選択にとりたてて特殊性は感じられない。しかしながら、それらの中には消費地遺跡ではみられないタイプのものもある。また、個々の骨蔵器が、専用容器か什器からの転用品であるかの検討は必ずしも十分とはいえず、意識及び社会情勢の変化を考える上で今後の大きな課題であるといえる。

容器容量については、過半数が 3～7 L に納まり、現代東日本で通有の「七寸骨壺」に近似する。部分拾骨を慣例とし、小型の骨壺（「四寸骨壺」）を使用する西日本に対し、新潟県を含む東日本では全体拾骨を慣例とするため大型の七寸骨壺を使用するという [浅香 2007]。本県出土の近世骨蔵器については、基本的に成人一体の焼骨すべてを収納するのに適したサイズを用いる傾向があると言える。出土事例からはその他、一部拾骨・分骨や子供用に使用されたと考えられる小型のタイプや、合葬・再葬に使用されたと考えられる大型のタイプも見られることから、適宜目的に応じて使い分けていたと考えられる。

## 副葬品の様相

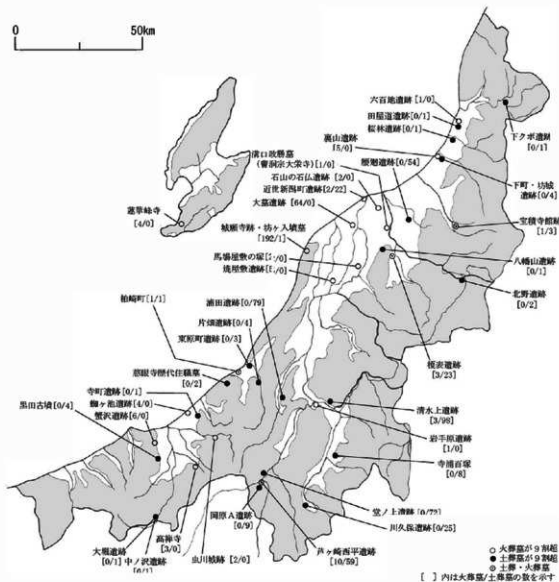
事例は少ないが、土葬墓を中心に認められる。特に寛永通宝を基本とした六道銭は多くの墓で通有にみられるものであるが、枚数は一定していない。それらには有機質編物痕が付着しているものもあることから、頭陀袋等に入れられるケースもあったと考えられる。その他、漆器椀・近世陶磁器・刀子・煙管・鏡・数珠・山笠などが少量見られる。こうした出土副葬品は民俗例との共通性が強く認められる。

## 埋葬容器の変遷

良好な調査事例が極めて少なく判然としないものの、これまでの事例から出現順は、火葬墓では火葬骨直葬（有機質袋状容器など含む）一陶製骨蔵器一専用骨蔵器、土葬墓では縦位桶棺一横位桶棺一縦位箱棺・横位箱棺といった出現順序が想定されている。その他、土葬墓では近世前半に横位箱棺が単独で検出される例があり、中世屋敷墓との関連が窺われる。

## 【引用・参考文献】

- 相羽重徳 2009 「新潟県における近世骨蔵器の諸相」『新潟県の考古学Ⅱ』新潟県考古学会  
浅香勝輔 2007 「糸魚川から伊良湖岬まで」『火葬後拾骨の東と西』火葬研究叢書 2、日本葬送文化学会編、日本経済評論社  
井之口肇次 1977 「葬送の種類」『日本の葬式』筑摩書房  
寺島孝一 2002 「土葬と火葬のあいだ」補遺『考古学ジャーナル』486、ニューサイエンス社  
堀 一郎 1951 『民間信仰』岩波書店



第1図 発掘調査された近世墓【相羽2009より転載】

【参考文献】 1. 新潟県朝日村教委 1991 『下クボ遺跡』 2. 神林村教委 2002 『六百日遺跡』 3. 新潟県教育委員会・(財)新潟県歴史文化財調査事業団 (以下、「県教委・財」と略) 2008 『田屋遺跡 I 宮の越道跡 I』 4. 県教委・財 2008 『中部北遺跡 榎林遺跡 II』 5. 中余町教委 1993 『築地 裏山遺跡』 6. 中余町教委 1999 『下町・坊城遺跡 III』 7. 新発田市教委 1990 『三光館跡・宝積寺館跡』 8. 笹神村教委 2002 『歴廻遺跡』 9. 県教委・財 2005 『北野遺跡 II (上層)』 10. 新潟市教委 2007 『近世新岡町遺跡』 『平成 18 年度新潟市文化財調査概要』 11. 柏崎 健ほか 1994 『石山の石仏遺跡 (遺跡番号九五)』 『新潟市史資料編』 新潟市 12. 福田仁史 1999 『越後沢海藩主溝口政勝の墓』 『新潟県の考古学』 高志書院 13. 津新市教委 2001 『八幡山遺跡発掘調査報告書』 14. 五泉市教委 2005 『板表遺跡』 15. 白根市教委 1984 『馬場塚敷遺跡等発掘調査報告書』 16. 新潟県教委 1973 『大塚遺跡・釈迦堂遺跡・半ノ木遺跡』 17. 18. 巻町教委 1985 『城願寺跡・坊ヶ入墳墓』 19. 新潟県教委 1976 『焼塚敷遺跡・杉之森遺跡』 20. 県教委・財 1996 『清水上遺跡 II』 21. 新潟県教委 1980 『上の原 II・III 遺跡 木下屋敷遺跡 岩出原遺跡』 22. 中里村教委 2005 『堂ノ上遺跡』 23. 津南町教委 2002 『戸ヶ崎西平遺跡』 24. 津南町教委 2005 『岡原A遺跡』 25. 六日町教委 1974 『寺尾百塚発掘調査報告書』 26. 湯沢町教委 1986 『川久保遺跡』 27. 小国町教委 2000 『浦田遺跡発掘調査報告書』 28. 柏崎市教委 2001 『宮之下遺跡群』 29. 県教委・財 2005 『東原町遺跡・下津北遺跡 II』 30. 柏崎市教委 2001 『柏崎町』 31. 柏崎市教委 2004 『慈願寺歴代住職墓』 32. 県教委・財 1995 『宮平遺跡・虫川城跡・中ノ山遺跡』 33. 吉川町教委 1995 『寺町遺跡第二次発掘調査報告書』 34. 新潟県教委 1981 『柳ヶ池遺跡』 35. 県教委・財 2004 『蟹沢遺跡』 36. 県教委・財 2002 『黒田古墳群』 37. 清里村教委 1999 『等仙寺・観木・山崎塚遺跡』 38. 県教委・財 1997 『中ノ沢遺跡』 39. 県教委・財 1996 『大塚遺跡』 40. 小木町 1984 『佐渡国蓮華寺骨堂修理工事報告書』

# 東北地方日本海側における近世墓

高橋 学（秋田県埋蔵文化財センター）

東北地方日本海側にあたる山形県、秋田県、青森県で発掘調査された近世墓あるいはその関連遺構が確認された遺跡は、第1表に示したように多くはない。当該3県では青森県が突出した形を示しているが、それは東部の太平洋側に集中し（第1図24～42の19遺跡で約250基）、西部の日本海側では限定的である。検出事例が少ないことについては、発掘調査の対象となることが稀な近現代あるいは現在も利用されている墓地の成立時期や各種開発予定地内の地目（墓地、境内地）を考慮した発掘回避なども要因と考えられるが言及できない。

本稿では、発掘調査された当該地方の近世墓について、葬法とその分布状況について紹介する。

## 1 葬法とその分布状況

①**火葬墓** 埋葬方法が明確な遺構に限定すれば、火葬墓は秋田県の中～南部と青森県中～北西部に分布し、山形県や秋田県北部、青森県東部では未確認である。青森県中～北西部の五所川原市隈無（8）遺跡では火葬場跡も調査されている。火葬骨の収納容器では、弘前市の弘前藩津軽家墓所のうち第3代藩主津軽信義墓から信楽焼の茶壺が出土している。秋田県横手市の本郷家墓地（第2図）では底部を打ち欠いた肥前産大甕に火葬骨を収納していた。その他、多くの火葬墓は容器をもたず、土坑に直接納められたようであるが、13世紀代の事例では曲物容器に火葬骨が入れられていた事例も存在する。いずれにしろ、本集成作業を通して火葬墓の確認件数が予想以上に少ないこと、分布の偏在を記録しておく。

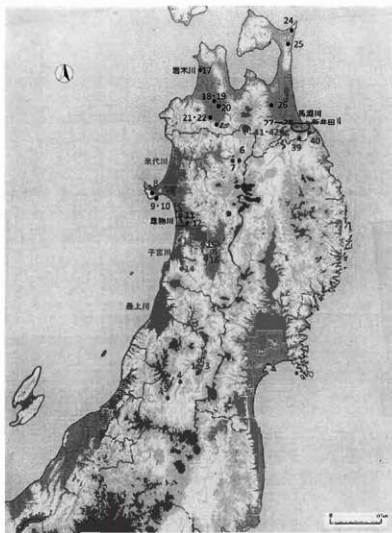
②**土葬墓** 土葬墓では遺体を木棺等の容器に埋納する場合と土坑内に直葬する二者が想定される。前者では平面形が長方形・方形を示す直方体・立方体箱形木棺と円形の桶形木棺（早桶）といった木質容器が認められるが、陶製の甕棺などは未検出である。ただし、木棺の場合であっても、部分的な木片や押圧痕としての確認に留まる事例が多く、全体構造を復元できる遺構は極端に少ない。このなかにおいて、木棺が多く確認された山形市渋江遺跡の例を紹介する（第3図）。

ここでは二度の調査で200基の近世墓（18世紀後半～19世紀後半）が検出された。うち、第4次調査区で確認された169基の墓については、箱形木棺93基（55%）、早桶12基（7%）、直葬64基（38%）とするデータが示されている。箱形木棺には、土坑底面に複数の横木を渡した上に縫を敷き、その上に木棺を置くタイプ（箱形A）と底面に直接木棺を置くタイプ（箱形B）に分けられる。その基数は、箱形Aが52、箱形Bが17である。

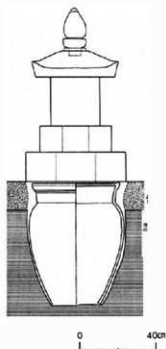
## 2 まとめ

東北3県における近世墓の集成作業により、該当する遺跡数が多くはないという想定内であったものの、分布の偏在はそれを超えるものであった。すなわち、青森県東部域に一定数の土葬墓が存在するのに対し、日本海沿岸部の山形県庄内地方や秋田県北部～青森県西部では極めて限定的である。加えて火葬墓の抽出数が予想以上に少ないことも確認できた。分布の多寡・偏在の要因をここで述べることはできないが、当該沿岸部域に浄土真宗の寺院・門徒数が多いこと、真宗が火葬の奨励を積極的に行っていることも因子として考慮する必要があるのかもしれない。

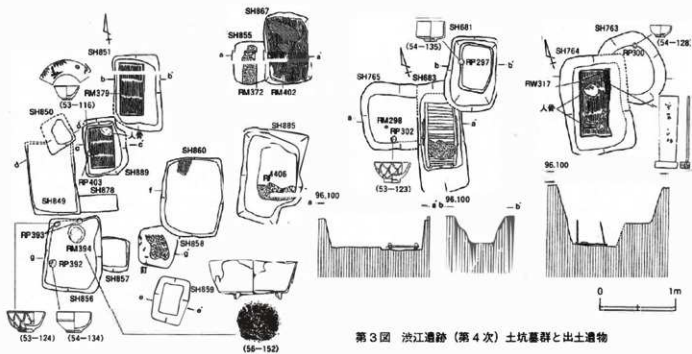
なお、紙数の関係から文献類は記載を省略している。研究集会の発表要旨・資料集を参照されたい。



第1図 山形・秋田・青森県の近世墓・関連遺構検出遺跡位置図



第2図 本郷家墓地 墓塔と収納容器



第3図 江戸遺跡(第4次)土坑墓群と出土遺物



## 討論と見学会について

8名の講師による発表終了後、総括として討論が行われた。コーディネーターは当センターの川畑誠が務めた。発表を通し痛感されたのは地域間の多様性であり、討論では主に3つのテーマで共通点を見出す試みが取られた。

**火葬と土葬の展開：**近世は火葬から土葬への転換と言われるが、これは中世的墓制である火葬と、近世的墓制である土葬の対比としての端的な表現と理解でき、実際には時系列・地系列、さらには仏教宗派・階層性といった様々な様相の中で火葬と土葬は近世において併存していることは各氏の発表を通し理解される。一部の事例を除き、両者は排他的なものではない。谷川章雄によれば火葬→土葬の転換と近世寺院の成立はほぼ時期を同じくしており、「近世寺院と近世墓の成立が深く関わっていたことが想定できる」とする。土葬への大きな流れの中でお火葬が採用されるのは、浄土真宗に顕著な宗派としての葬法の他に、火葬の本質的な事象である「遺体のコンパクト化」も考える必要がある。

発掘調査事例で言えば、九州・石川・富山・新潟は火葬と土葬が併存していることが確認されている。土葬を主体とするのは山陰・福井県若狭地域・東北日本海側で、福井県越前地域においては火葬主体である。とは言え、「江戸時代以来の墓地は現代でも利用されており、発掘調査される機会は希少なのだ」とする村上氏の言葉に耳を傾ければ、上記の諸様相を類型化できるほど発掘調査事例は多くなく、現時点での傾向と見るべきであろう。

**埋葬施設：**土葬では、遺体を木製容器（早桶・木棺）に入れるものと甕棺に入れるものがあり、被葬者の階層性を示すとされている。木製容器の差異は、掘り方の平面形態によるものと、遺体の収納形態によるものがある。平面形態の差異は具体的には円形坑と（長）方形坑の違いとして現れるが、地域ではらつきがある。円形→（長）方形の移行が見られる九州・石川例や、長方形が先行し円形・方形が併存する山陰の例が提示されたが、近世を通じて円形のみという特殊な調査例もあることから一概には言えない。収納形態の差異-臥屈葬か座葬か-は、長方形棺と早桶・方形棺の違いである。こちらについての議論は深められていない。中～下位武士層や農民が用いる木製容器のほか、高級武士層・僧侶等は甕を棺に用いる。九州では肥前系陶器の甕が、山陰では越前焼の甕のほか地元産が、石川県ではほぼ越前焼の甕が用いられる。一方福井・富山・新潟・東北では甕棺の検出例がない。これらの甕が日用品の転用なのかあるいは専用品かははっきりせず、石川県の越前焼甕は焼きが甘い・調整が粗雑・大型といった特徴から、あるいは特注品（ないし専用品）ではないかとの指摘もあった。

**副葬品～トラベルセットは見出せるか：**山陰地方を報告した中森氏によれば、山陰両県の近世墓から出土した副葬品は「銭貨・刃物類・煙管」という3点で構成されるケースが多いという。この六道銭・魔除けと考えられる刃物・個人の愛玩品を、被葬者が黄泉路へ旅立つ際に持たせる「トラベルセッ



討論の様子



ト」と理解した。九州では銭貨が主で、櫛・眼鏡のような愛玩品は時代が下がると出てくるとのこと。福井県は銭貨・土師皿が目立つ程度で副葬品は少ないが、浜瀨遺跡のように鉄製品を副葬した例もある。石川県は早桶・甕棺に副葬品が多く、早桶では銭貨・数珠・漆器椀（及び什器）・箸の組み合わせが目立つ。甕棺では銭貨・土人形・煙管が目立ち、方形木棺でも同様の傾向が見られるが時代が下ると薄葬の傾向がある。新潟県では銭貨と漆器椀のセットが目立つ。東北地方では銭貨・煙管にセット関係が見られ、数珠や漆器椀が入ることがある。太平洋岸の南部藩地域では、日本海側にはほとんど見られない火打金が入る傾向がある。いずれも共通するのは六道銭を納めることで、煙管に代表される愛玩品は、数珠や櫛に形は変わるが入れる傾向が多い。刃物は納める地域が散見されるが、山陰は顕著である。また石川県以北では漆器椀を入れるケースが目立っている。

他にも福井県若狭地域に顕著に見られる両墓制の問題、墓標に見られる階層性、個人墓から家族墓への移行などのテーマがあったが、いずれも議論を深められないまま終わったのは残念であった。

発表・討論に加わって改めて感じたことは、近世墓とは地域・時代・宗派が複雑に絡み合って今に残されるものであり、その多様性に圧倒された。それは、テーマを絞りきれなかったこと（絞りすぎると事例そのものが抽出できなくなる、発掘調査事例の少なさ）からの帰結として当然のことではあったが、当初事務局側が心配していた「本当に各地で事例が集められるか」という悩みは杞憂に終わった。精力的に事例を集め、分析し、発表いただいた報告者各氏には深く謝意を表したい。

研究発表の翌日に行われた見学会では、資料見学、現地見学の2本立てで実施した。資料見学では、石川県の木ノ新保遺跡、金沢城下町遺跡（東兼六町5番地区）の遺物を前にして活発な意見交換が行われた。なかでも、金沢の城下町遺跡で出土が顕著な土人形について、どういった目的で入れられるのか、そのセット関係はどうかなどの質問が相次いだ。資料見学の後、野田山墓地と金沢城下町遺跡（東兼六町5番地区）の現地見学を実施した。野田山墓地は、発表者の庄田氏とご同行いただいた滝川重徳氏の案内の下、大急ぎの行程であったが、藩主前田家墓所～八家墓所～一般の墓所を周った。墓地の中には、埋葬後小さなマウンドを築き、その上に墓標を載せる江戸時代そのままの姿を残すものも散見され、また時津氏の発表にあった「墓標の巨大性は階層性そのものを現す」あり方を、八家墓所～一般墓所でまざまざと感ずることができた。

（和田 龍介）



資料見学の様子



現地見学の様子

---

石川県埋蔵文化財情報

第 33 号

発行日 2015（平成 27）年 3 月 31 日

発行 公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒 920-1336 石川県金沢市中戸町 18 番地 1

TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731

URL <http://www.ishikawa-maibun.or.jp/>

E-mail address [mail@ishikawa-maibun.or.jp](mailto:mail@ishikawa-maibun.or.jp)

---

印刷 株式会社ショセキ

---

©（公財）石川県埋蔵文化財センター